
化け物屋開店

くるひなた

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

化け物屋開店

【Nコード】

N4172X

【作者名】

くる ひなた

【あらすじ】

魔物や幽霊どもに懐かれつつ、彼らを用いてイヴが開店したのが『化け物屋』。お代は少々高めです。しかし、人外を引き寄せる少女には、本人も知らない大きな秘密があった。

宝探し

わんわんわんわん！　ここ掘れわんわん　！

ポチ　ならぬ銀色の毛並みの美しい狼が、吠えて知らせる土の中。

正直爺さんならぬ年頃の乙女が、大きなスコップをざつくざつくと振り下ろし、一心不乱に掘り起こす。

「ここにすごいものがあるんだね、フェンリル。ご褒美は何がいいか、考えときな」

「……わんっ」

明け方近くまで雨が降っていたので、地面は湿って柔らかく掘りやすい。

頬に土が飛ばすと泥濘に足を取られようと、まったく気にしないで土をかき続ける少女を、フェンリルと呼ばれた銀狼が気遣わしげに眺めている。彼は、いわゆる魔物と呼ばれる一族に生まれた。

昨夜は、満月だった。

魔物が最も力を増すその夜に、例外なく血を疼かせたフェンリルは姿を変えて闇をゆき、精度を増した嗅覚で何かを捉えた。

闇が去って朝日が昇り、いつも通りのふさふさな毛並みに戻った彼は、主人を寢床から引つ張り出してその場所まで連れてきたのだ。朝霧のまだ濃い中、ふわああと大欠伸を隠しもしないで、ファンリルの主人の少女　イヴは辺りを見渡した。

そこは、何の変哲もない森の中の一角である。

木の実や薬草を取りに何度も通ったことのある場所だが、その時も一緒にいたフェンリルは何も反応しなかった。

しかし、これまでも彼は何度かイヴに場所を示し、埋蔵金やお宝

をもたらした功績がある。

この日も、喋れぬ銀狼が示すに従って土を掘り起こしながら、イヴはそこから素晴らしいものが出てくることを疑わなかった。

ガツンッ……！

その時。スコップの先が、何か堅いものに当たった。

「うっん、お宝の予感！ 大物の感触っ！」

一気にやる気が増したイヴは、鼻歌混じりにせつせと土を掘り返し、やがて埋っていた何かの表面があらわになった。

「……ん？ これは……？」

それは、大きな木の箱のように見えた。

「フェンリル、手伝って」

あまりの大きさに、それを土から引つ張り出すのは無理と判断したイヴは、周りの土を丁寧にとけて、その場で蓋だけでも開けてみることにした。

大きなスコップを放り出し、脇においていたシャベルを片手に自ら掘った穴に飛び込む。

呼ばれたフェンリルもそれに倣い、穴に入っては両の前足で土をかいた。

ほどなく、箱の蓋に乗っていた土はほぼすべて取り除かれ、描かれた紋様がよく見えるようになった。

箱は、新しいものには見えないが、表面の装飾は崩れた様子もなく、埋められた時からほとんど質は落ちていないのではなからうか。その豪華な様子からして、中身が空、あるいはガラクタということはないだろう。

鍵は、かかっていたいなかった。錠を通す部分はあるのに、その肝心の錠がないのだ。

それが、イヴは少し引つ掛かる。

「まさか、もう盗掘された後ってこと……ないよね？」

「わんっ！」

彼女がそう尋ねると、前足を泥だらけにしてお座りしていた銀狼が、不満げに一つ吠えてから穴から外へ飛び出してしまった。

確かに彼は、愛する主人に空を掴ませるようなへマはしないだろう。

イヴが、「ごめんごめん、信じてるよ、フェニー」と謝って、泥だらけになった手袋を脱いで喉を撫でてやると、素直な彼の機嫌はすぐに快復した。

「それでは、いよいよ御開帳ー」

イヴは両手とも汚れた手袋を取り去ると、ポケットから新しく綺麗な手袋を出してはめた。

お宝を素手で触るなんてもつてのほか。価値が下がっては悔しいではないか。

鍵用の出っ張りに指を引っかけると、蓋は意外に簡単に持ち上がった。

穴の淵には銀狼が行儀良く前足を揃えて、お座りして様子を見守っている。

土が落ちないように慎重に蓋を持ち上げたイヴは、半分ほど開いたところで脇からそつと中を覗き込んでみた。

すると

「つ……………！」

中身を見たイヴは驚いて息を飲み、つい手を滑らせてせつかく開きかけた蓋を落としてしまった。

ゴン…………ツ！と重い音がして、再び蓋が閉じてしまったが、彼女はそんなことを気にせず慌てて穴から飛び出した。

「フェ、フェンリルっ！ ちょっと、あれ……………」

「わん」

金銀財宝を予想してわくわくしながら覗いたイヴの目に映ったのは、期待に反してまったく別のもの。

「お宝どころか 棺桶じゃないかっ！」

はつきりと全貌を見たわけではないが、中には明らかに人の形をしたものが横たわっていた。

土の中に埋っていたのだ、生きている人間のわけがない。つまり、死体だろう。

改めて穴の中を見下ろしたイヴは、蓋の閉まった箱をまじまじと眺める。

これが棺桶だとするならば、大きさからして中に入っているのは大人　おそらく男性と思われる。

「やばあ、面倒くさあー。嫌なもの掘り返しちゃったー」

村の共同墓地から遠く離れた場所であったので、油断した。

イヴの知っている村人達は皆信心深く、人が亡くなると必ず丁寧に墓地に葬られる。

こんな適当に、森の中に埋めたりする輩はまずいないだろう。

それならば、今イヴが掘り出してしまった棺桶は、共同墓地が整えられるよりも前のずっと大昔に埋められたのだろうか。

しかし、それにしてもまったく腐食した様子もないし、ちらりとみただけだが中身の遺体も骨には見えなかった。

もしかしたら、村人に知られないように誰かがこっそり、あるいは外部からやって来た人間が埋めた、訳ありの棺かもしれない。

どちらにせよ、イヴが面倒なものを見つけてしまったことには変わりはない。

本当なら、村の保安官に届け出て、事件に巻き込まれた遺体でないか確認してもらわなければならないだろう。

しかし

「アイツと、顔合わせたくない……」

イヴはげんなりため息を吐いた。

イヴの住むラナーク村唯一の保安官は、彼女の幼馴染み。

情熱を持って仕事に打ち込む頼もしい青年であるが、いささか暑苦しいのが玉にキズ。

怪しい棺桶を見つけたなど知らせれば、現場検証から事情聴取ま

で、長時間拘束されるに決まっている。

見知らぬ遺体の事情などにまつたく興味のないイヴは、そんな無駄な時間を過ごすのはご免だった。

「よし。見なかったことにしよう」

「わっ わわんっ！」

幸い、このことを知っているのはイヴとフェンリルだけだ。

彼女は面倒ごとを避けるために、棺桶を再び埋め直すことに決めた。

そうと決まれば早いに超したことはことはない、再び大きなスコップを手に取り土を戻し始めてイヴを、慌てた様子で銀狼が止める。

掘り起こすのはたいへんだが、かき出した土を穴に戻すのは割と簡単だ。

イヴは自分の服を引っ張ってやめさせようとするフェンリルに構わず、間もなく地面を元通りの平に戻し終えた。

掘ったことがばれないように、落ち葉や枯れ木を被せて完成だ。

さて、あとは村人に怪しまれないうちに森を出て、土に汚れたスコップと我が身をさっさと家に返さねばならない。

「ああ、重労働。とんだ無駄足だった。フェンリル、君、朝ご飯抜きだからね」

イヴはまだ背後で名残惜しげに土をかいている銀狼を睨みつけると、くるりと踵を返してその場を後にしようとした。

だが、その時

「さて」

地の奥から響いてくるような、重い強い声が、彼女の足をその場に縫い付けた。

次いで、えも言われぬ感覚が足元から這い上がり、全身が総毛立つ。

イヴが思わず後ろを振り返ったのと、埋めた穴の場所からフェンリルが飛び退いたのは、同時だった。

次の瞬間

ドンッ……!!

イヴが先ほど被せたはずの土が、大きく噴き上がって宙を舞った。土だけではない。閉じたはずの棺桶の蓋も、高く跳ね上がった。

「っ!?!」

声も出ない主人の前に、駆け寄ってきた銀狼が庇うように立ち塞がった。

イヴは目の前の柔らかな毛並みに縋るように触れ、その温かさに少し安堵すると、ごくりとひとつ息をのんで前方の光景に目を凝らす。

噴き上がった土は重力に従ってばらばらと辺りに落ち、その分ほっかりと開いた穴の中から、すつと何かが現れた。

人だ。

それは、人の形をしていた。

出てきた魔物

それは、闇そのもののような漆黒の髪。朝日に照らされ輝くのではなく、光を奪って食らい尽くすよう。

こちらをひたと見据えた瞳は、鮮血のような妖しい赤。伶俐な目元にすつと通った鼻筋、薄い唇。

まるで透けるように白い、温かみをまったく感じさせない肌。

それは、イヴの住まうラナークのような辺境の村には実に不釣り合いな、壮絶なまでの艶を含んだ美貌の男。胸から上の部分だった。

何故なら、彼が立っているのはまだ穴の中で、地面に上がってこないままイヴ達を見据えていたからだ。

ドーンと、大きい音がした。

高く跳ね飛ばされていたらしい棺の蓋が、穴から少し離れた地面によつやく落ちてきて、その衝撃で粉々になってしまった。

一瞬壊れた蓋の方をちらりとした男は、しかしすぐに視線を戻して、作り物めいた形のいい唇を動かした。

「お前か、娘。俺の棺の蓋を開いたのは」
「……」

低い美声は、先ほどイヴを待てと呼び止めたそれと同じ。

俺の棺というからには、彼こそがあの棺桶に横たわっていた人物なのだろうか。

地中に埋まった棺桶に入っていた人物が、自分の目の前で立ち上がって、言葉を発している。

この異様な状況に、普通の者ならパニックになってしかるべき。

しかし、何故か逆に落ち着いて冷静になったイヴは、何を思ったのか突然男の方へと駆け寄って、少しの躊躇もなく手に持ったスコ

ツプを振り上げ、べしりつと彼をなぎ倒した。

「っ！ おいつ！」

「フェンリル、手伝って！」

男はとっさに両手を盾にスコップの打撃を防いだが、イヴのまさかの行動に面喰らったのだろう、ふらりと身体を傾がせた。

彼は、クツシヨンのような柔らかかな布が敷き詰められた棺桶の中に立っていたのだ。元々足元が安定していなかったのだから、仕方がない。

その隙を見逃さなかったイヴは、物凄い早さで周りの土を掻き集めると、棺桶の中に尻をついた男に向かって、一心不乱にそれを浴びせかけた。彼を再び土の中に返そうとしているのだ。

「おいこらっ、やめんか小娘っ！」

「フェンリル、何やってんのっ！ 土かけてっ！！」

「……」

容赦なく降り注ぐ土の雨に眉を顰める男と、必死の形相で彼を埋めようとするイヴを見比べて、銀色の狼は困ったように穴の周りをつろつろつろつろ歩き回る。しかし、少女の茶色の瞳がキツと彼を見据え、高い声が抗えぬ言葉を口にした。

「従え、フェンリル！」

「！」

その瞬間、彼の中の迷いは吹き飛び、主人の命に忠実な下僕となる。

フェンリルはくると穴に尻を向けると、その強靱な両の後ろ足が凄まじい力で地面をかいた。

ドオツ……と穴の壁が崩れ落ち、大量の土が男の上に降り注いだ。飼い犬のようないつもの彼とは違う、魔物らしい力を使ったフェンリルの働きに、巻き込まれてはならないとイヴは数歩後ずさった。だがしかし、穴はまたしても彼女の前に姿を現すのだ。

しかも、それはさらに大きく膨れ上がり、今度は彼女も銀狼も巻き込む形で、辺り一面を吹き飛ばした。

ドオオオン……ッ！！

「ぎゃあーっ！！」

土の塊とともに、得体の知れぬ力によって宙に投げ出されたイヴは、さすがに大きく悲鳴を上げた。

それを聞いた銀狼は、自らも跳ね飛ばされながらもぐるりと回転して体勢を整えると、主人の少女の襟首を空中でくわえてキャッチし、地面に降り立つ前に己の背中に乗せた。

おかげで、ふわふわの毛並みに守られたイヴは、かすり傷一つ負わずに済んだ。

「何するのっ！ 危ないじゃないか！」

「何をする、はこちらの台詞だ、小娘」

降り立ったフェンリルの目の前には、土に埋めたはずの件の男が、今度は全身を現す形で立っていた。

実に不機嫌そうに、胸の前で両腕を組んで、イヴをひたと睨み据えている。

それもそうだろう、危うく生き埋めにされるところだったのだから。

「誇り高き銀狼一族が、人間の小娘のお守りとは。なにか、大きな弱みでも握られたか？」

「……」

男は、イヴを庇うように背中に隠したフェンリルにそう話しかけた。

銀狼であるフェンリルは赤い瞳、土の中から現れた男も赤い瞳。

赤い瞳は 魔物の証。

人外な力といい、土の中に埋められても息を吹き返したことといい、この男もおそらく魔物の一種なのだろう。

「それにしても、何とも不躰な娘だな。この俺をどついて土に埋めようとは……」

「掘り起こしてしまったのは、何かの不幸な間違いです。どうか安らかに、私の与り知らぬ所でもう一度お眠りください」

「ふん、戯れ言を申すな。せつかく解かれた封印に、再び戻る馬鹿がどこにいる」

「封印……っ！」

安らかに眠っていると思った遺体は、本当は封印で閉じ込められていた魔物であった。

イヴは金銀財宝を手に入れるどころか、そんな得体の知れない存在を世に放ってしまったのだ。

「ああー、いやあー！ まあた面倒くさいの、来たー！」

「おい、いろいろと失礼だな、小娘」

イヴの周りには、昔からいろんなモノが集まってくる。

それは珍しい種類の動物だったり、稀少な昆虫だったりもする。

しかし、それだけではない。

現在では、ほとんど伝説のようになっていく“魔物”と呼ばれる存在もまた、引き寄せられるように彼女の元にやってくる。

自宅には様々な魔物が居座り、さらには肉体も持たない魂だけのモノも、また。

もちろん、美しく恐ろしい魔物として名高い銀狼一族であるフェンリルもまた、運命に導かれるようにイヴと出会ったのだ。

そんな彼のふさふさの背中に掴まったまま、イヴは後ろから彼の尖った両耳をピンと引っ張った。

銀狼は赤い目を見開き、ビクリと硬直した。

「フェンリル。君……ここに埋まっている奴の正体を分かっている、掘らせたね？ あいつは何？」

「……」

残念ながら、フェンリルはイヴの言葉を解するが、狼の口は人語を操ることはない。

銀狼の中でも、生き神と呼ばれるような何千年も生きている長老には、時たまテレパシーで言葉を伝えられる者もいるらしいのだが、フェンリルは困ったように主人を振り返り、きゅうんと子犬のように愛らしい声で鳴いた。

しかし残念ながら、そんな姿にもまったく絆されてくれない少女に、振り返ったのいいことに鼻面をへむっと掴まれてしまい、さらにきゅんきゅん切なく鳴いた。

それを見兼ねたのか、仁王立ちしていた男が思わず仲裁に入る。

「おい、やめろ。可哀想じゃないか」

「これは教育的指導です。躰です。誰が主人か、思い知らせるのです」

「いいや、ただの虐待だ」

「うるさい、部外者は黙ってて。っていうか、あんたが大人しく土の中に帰れば、フェンリルが泣くこともないんだよ。あんたのせいだよ」

「めちゃくちゃな理論だな、小娘」

男は呆れたようなため息を吐くと、組んでいた両腕を解いて、長い脚を動かして瞬く間にイヴ達との距離を詰めた。

そうして、ふと何かに気づいたように「うん？」と片眉を上げると、長身を傾がせイヴに向かって顔を近づけた。

「お前……ただの人間か？ 何か、異様に……」

かすかに戸惑いを滲ませてそう言った男は、おもむろに手を伸ばして彼女の頬に触れようとした。

しかし、イヴは欠片の躊躇もなく、己に届く前にそれをベシリッと叩き落とした。

男はかすかに赤味を帯びた己の手の甲を見下ろし、一瞬きよとんとした顔をしたが、次の瞬間

「っ……………！」

威圧的な美貌がニヤリと不穏な笑みを浮かべ、今度は容易に反応できないような素早さで、彼の片手がイヴの顎をがしりと掴んだ。

ほむほむがちょんごい

「お前、年頃の娘のくせに可愛げがないな。見目は悪くはないのに、勿体ない」

「ちよつと……」

「……それより」

露骨に眉を顰めるイヴを、男は赤い目を光らせて面白そうに眺めながら、掴んだ彼女の顎をぐつと上を向かせる。

露になった少女の華奢な首筋に顔を寄せ、その奥に透ける血管を焦がれるように、ふんふんと鼻を鳴らした。

「お前……何故こんなに、うまそうな香りがするんだ……？」

そう言った男の舌が、べろりと無遠慮にイヴの首筋を舐めた。ちよつと、頸動脈を下から上へ辿るように。

ぞわりとした感触に、イヴの右の拳が彼の顔面を狙って繰り出されたが、彼女の顎を掴んでいない方の手が易々とそれを阻んだ。

「何なんだ、お前は」

「あんたこそ、何者だよ」

「俺か？俺はな……」

イヴの顎を掴んでいた男の手は、首筋を通って滑り降り、彼女を抱き寄せるように背中に戻された。

ぐつとさらに密着した男は、イヴの項に顔を埋め、その香りを堪能するように肺一杯に吸い込んだ。

「俺は、シド」

「シド？それがあんたの名前？」

「そう、俺の名だ。他のことは忘れた」

「忘れたあ？」

シドと名乗った男は、猫のようにイヴの首元に顔を擦り寄せ、深

く甘いため息を吐いた。

イヴは、突然懐いてきた大きな獣に戸惑いながらも、不用意に触れられるのは鬱陶しい。

離れると命じたが、彼はフェンリルのようなイヴの下僕ではないので、言うことなんかききはしない。

「あなた、魔物でしょ。自分が何の眷属かとか、何で誰にこんなところに封印されたのかとか、覚えてないの？」

「覚えてないな。別に、今さらどうでもいいことだしな」

「どうでもいいことないでしょ。普通、封印を施した奴に復讐しにいったりするもんでしょ。恨み晴らしてきなよ、今すぐ。こういうのは勢いが肝心　はいっ、いつてらっしやい！」

彼を、再び棺桶の封印に戻すことは、さすがにイヴももう諦めた。それでも、面倒ごとを避けたい彼女としては、シドがどこかの誰かさんへの復讐に目覚め、その者の元へとつとと消えてくれるように仕向けたいのだ。

しかし、イヴの打算だらけの激励も虚しく、シドはにやりと笑って首を横に振った。

「いいや、封印の眠りは意外に心地よくて快適だったからな。別段、腹も立ってない」

「……おおらかだね」

「むしろ、とてもいい夢を見ていた気がしたのに、それをお前に邪魔された。こっちの方が、充分復讐するに値する恨みだな」

シドの声は低く柔らかく、まるで睦言を囁くように甘い。イヴの首筋に擦り付けた唇が不穏な笑みを刻み、その隙間から鋭い犬歯が顔を出して、彼女の薄い肌をくすぐった。

人間ではあり得ない長さで鋭さの、牙だ。

戯れにそれを突き立てられただけで鮮血が吹き出し、ただのかわい人間であるイヴは簡単に命を落とすだろう。

「……お望みならば、もう一回眠らせてあげるよ。スコップで思いっきりどっつけば、すぐだよきつと」

イヴはそう強がりながら、心の中ではさすがに少しまずい状況かなと思いつつ、ちらりと助けを求めるように視線を下げた。

その先には、彼女の忠実な下僕である銀狼が、赤い目でじっとシドを見据えていた。

フェンリルはシドを警戒はしているようだが、どちらかということ値踏みしているようにも見える。

彼は、イヴの危機にはひどく敏感で、彼女へ敵意を向けるものを決して許さない。

そのフェンリルがうなり声一つ上げていないところを見ると、このシドという魔物にイヴを傷付ける危険がないということだろうか。彼女が銀狼を眺めながらそんなことを考え込んでいると、不満げな男の声が耳のすぐそばでした。

「俺を前にしてよそ見をするとは　いい度胸だ」

背中を回っていたはずのシドの掌がイヴの後頭部を包み込み、ぐっと上を向かせた。

彼女の勇ましい拳を捉えていたもう片方は、いつの間にか腰に巻き付けていた。

「っ！」

次の瞬間　イヴが抗う隙も与えず、柔らかいものが彼女の唇に押し当てられた。

それは、見た目の冷たさとは不釣り合いに、いやに温かなシドの唇だった。

足元で、一瞬フェンリルが鋭く唸ったが、シドはそれをちろりと見下ろしただけで、すぐに視線を逸らしてしまう。

そうして、無防備に半開きだった少女の唇を抉じ開け、彼は自らの舌をぬるりと押し込んだ。

ところが、侵入させた舌がイヴの唾液に触れた瞬間、シドはビクリと身体を震わせ、その血のように赤い瞳をこれでもかと思開いた。

(あーあ……)

それを感じたイヴは、心の中で大きいため息を吐いた。そうして、

身体の力を抜いて、従順にすべてを預けた。

イヴを抱きしめる男の両腕に力がこもった。

シドの舌は彼女の唾液を掬いとるように蠢き、それを己の口内に奪っていつては喉を鳴らす。

足元の銀狼は鼻に皺を寄せて低く唸りながらも、止めようとはしなかった。

どれくらい、そうしていただろうか。

シドは、ようやく唇を離した。

しかし、イヴを抱きしめる腕を緩める気はないらしい。

酸欠で息を荒げるイヴを見下ろす彼の赤い瞳は呆然としていて、しばらくの間言葉に詰まったように唇を震わせていた。

そうして、やっと振り絞るようにして発した声は、ひどく掠れていた。

「お前……何者だ。なぜ……なぜ、こんなに……」

鮮血に濡れたような瞳は、熱に浮かされたように危うげに揺れ、血色の悪かったシドの白い肌がわずかに赤味を増している。

彼はイヴの唇に残っていた唾液を指の腹で拭い、それを舌で舐めとっては呻くように言った。

「お前　なぜこんなに、美味いんだ？」

そうなのだ。

イヴは、とつても美味しいのだ。

なぜだかは分からないが、イヴは魔物にとってはこの上なく甘美な存在であるらしい。

彼女の、血液に始まり、唾液・涙・汗にいたるまで、体液と呼ばれるものはすべて、魔物の好みに恐ろしく合致するのだ。

それは彼らの食欲を満たすというよりは、例えば酒や煙草やお菓子のような嗜好品に近い感覚であるが、困ったことにこれには若干の中毒性があると、イヴ本人は思っている。

なぜなら、一度でもイヴの体液を口にしてしまったものは、彼女の側から離れることができなくなってしまいうらしいのだ。

そういふ輩が、現在イヴの家にはすでに何匹か居座っていた。もちろん、フェンリルもそのうちの一匹である。

そしてまた、このシドと名乗った得体の知れない魔物も、イヴの味を知ってしまった。

先ほどの穴を吹き飛ばした人外な力と、人並みはずれた美貌を見れば、彼がどうやら相当高位の魔物であると分かる。

魔物の美醜は、その身に秘めた力に比例するというのが、通説なのだ。

小さく可愛らしい魔物ならば、ペットとして飼うもよい。小さいものは勝手に昆虫やらネズミやらを捕って食うので、餌代もかからない。

しかし、ここまで大型で、しかも人型の魔物となると、世話をするものもいろいろ面倒が多く非常にわずらわしい。

イヴはシドを掘り出してしまったことを心から後悔し、足元の元凶たるフェンリルをもう一度睨んでやった。

「おい、娘。お前の名は？」

そうして視線を逸らしたことがまた気に入らなかつたのか、イヴの後頭部を掴んだままだったシドの掌が、彼女の顔を再びぐいっと上向かせた。

それがいささか乱暴で、首がごきりと鳴って痛かつたので、イヴは「むち打ちになつたらどうしてくれるっ！」と抗議して、無防備だった彼の向こう脛を蹴り付けた。

しかし、シドはわずかに眉をしかめただけで、彼女を咎めることも痛がる素振りもなく、ただ爛々と瞳を輝かせてイヴをじっと見つめている。

そして、音が聞こえるほどぐくりと大きく喉を鳴らすと、再びイヴの唇にかぶりつこうとした。

「だめ」

「……」

だが、イヴは両手で彼の口を塞いでそれを阻む。赤い瞳が、なぜと聞くように眇められた。

「やめときな。私は美味いかもしれないけど、あんまり一度にたくさん口にしない方がいい」

「……？」

魔物にとって美味しい存在と認識されることは、同時に非常に危険なことである。

美味しいものをより多く食したいと思うのは、人間でも魔物でも同じであろう。

イヴのわずかな唾液に魅せられたものは、では血はどんなに甘いのだろうか、汗は、涙は、そして愛液はと、次々と貪欲に求めるはずだ。

さらには、肉をかじり内蔵を啜り、彼らの欲は果てしなくイヴの身体を解体するに違いない。

しかし、イヴは十八歳になる現在まで、五体満足で無事生きてくることができた。

それには、それなりの理由があるのだ。

確かに、イヴの体液は魔物にとっても魅力的なものである。

しかし、それは嗜む程度の量であるからいいのであって、もしもそれを超えて口にするようなことがあれば？？

「胃が、めっちゃくちやもたれるよ」

何でも、ほどほどがちょうどいいのである。

居候

イヴは王都からほど遠い田舎の村ラムールで、一人で暮らしている。

両親については何も知らない。

育ての親であるカポ口婆さんが言うには、森で行き倒れていた娘を拾って介抱してみたら、彼女は数日後イヴを生んで亡くなったのだという。

カポ口婆さんは、魔女だった。といっても、ただの人間には違いないが。

薬草をこしらえたり、お産の手伝いをしたり、いわゆる医者の方りのような役目を担っていた。

彼女は何でも知っていて、村人からは深く尊敬される存在だった。そんなカポ口婆さんも、去年亡くなった。

享年百二十歳。大往生だろう。

死の間際までまったく弱った様子なかった婆さんに、イヴはきっと彼女は仙人か本物の魔女になって、まだまだ何千年も生きるのだと本気で思っていたから、ある朝ベッドで冷たくなっている彼女を見つけた時は、信じられなかった。

その頃にはすでに側にいたフェンリルは、必死で彼女を慰めた。葬儀の手配や諸々は、婆さんと懇意だった村長をはじめ、親切な村の人々がみんなやってくれた。

呆然としたままで涙も流せないイヴの代わりに、今は保安官となつた幼馴染みのロキが号泣してくれた。

独りぼっちになつてしまう彼女を心配して、養女にこないかと誘ってくれた夫婦もたくさんいた。

しかし、たつた一人の家族であつたボカ口婆さんの温もりが残っ

た家を、イヴは離れることができなかった。

その頃からである。

それまで出会わなかった大型の魔物が、イヴの元に少しずつ集まってきたのは。

「……なるほど、これは確かに胃にこたえる」

イヴは土を落としたスコップを担いで、フェンリルの背に跨がって帰路についていた。

面倒な拾いものの片棒を担いだ銀狼へのお仕置きのもりだったが、当の本人は主人を乗せて満更でもなさそうだ。

イヴは歳の割には小柄で貧相なので、魔物の彼には大した重さではないのだろう。

その後ろを、あまり血色のよろしくない顔で、シドがとぼとぼついてきた。

「忠告を聞かないからだよ。自業自得」

結局シドは、「口に過ぎたら胃がもたれる」と言ったイヴの言葉を聞かず、再度彼女の唇を塞いで味わった。

イヴは誰かとキスすることに関して、恥じらいも抵抗もまったくない。

いや、なくなってしまうた、と言う方が正しいかもしれない。

フェンリルとの出会いを皮切りに、大小様々な魔物が彼女の元に現れるようになった。

そして、様々な理由で彼らに糧を与えねばならなくなった時、イヴは一番手っ取り早くて痛みを伴わない方法として、キスによって唾液を与えることを選んだのだ。

少なくとも、見た目狼のフェンリルとのキスは、飼い犬に口を舐めさせるのと変わらないし、他の連中との間にも、色っぽい意味合いはまったくない。

ただ、完璧な人型相手の餌やりはシドが初めてだったので、少しばかり勝手が違って戸惑った。

彼は、さんざんイヴの唾液を吸って満足そうだったが、しばらくすると胃のあたりを抑えて重いため息を吐いた。

「うっむ……浴びるほど酒を飲んだ翌朝のような気分だ」

「ふーん。魔物も二日酔いするんだねえ」

「そう、確か以前にも……」

二度目のキスをさせる前に、イヴはシドに大きく開いた地面の穴を塞ぐように命じてみた。

村の誰かが知らずにやってきて、落ちたらたいへんだからだ。

ちゃんと元通りにしてくれたら、好きなだけキスしていいよと言
うイヴに、彼は意外なほど従順に頷き、瞬く間に乱れた地面を平坦
に均してしまった。

そのあまりの力に、イヴはやはり面倒なものに関わってしまった
と、改めて知ることになった。

結局、得体の知れない人外を放置するわけに行かず、彼女は顔色
を悪くした男を自宅に連れて帰ることにしたのだ。

幸い、カポロ婆さんが残してくれた家はなかなか立派で、彼を住
まわせるぐらいのスペースは充分ある。

他の居候の住処は、フェンリル以外はそれぞれ独立しているので、
特に問題も起こらないだろう。

森を抜けると田畑が一面に広がった場所に出る。

馬車も通れる広さの一本道を通り、泉の脇を抜けると、やがて赤
い屋根の一軒家が見えてきた。

大国ユングリングの外れの村ラムールの、さらに外れの一角に建
つそれが、イヴの家だった。

早朝だったためか、帰り着くまで村の誰とも顔を合わせずに済ん
だ。

一年で一番忙しい収穫期が終わったばかりラムールは、しばらく
は村全体がのんびり朝寝坊になるのだ。

ラムールの村人は、魔物に耐性がある。何故なら、カポロ婆さん

が多くの小さな魔物を従え、使い魔としていた光景に慣れ親しんでいたからだ。

だからもしも途中で誰かと会っても、見知らぬシドに騒ぎ立てることはないだろうが、またわけの分からないものを拾ってきて大丈夫なのか？と、親心からお説教をいただくに決まっている。

村人達は、イヴのようなら若き乙女の一人暮らしに、心配が尽きないようだ。

「そういえば、お前の名をまだ聞いていなかった」

「あんた、復活早いね」

家に帰り着く頃には、シドの顔色もすっかり元通りになっていた。血色がよくないのは元々なのであまり変わらないが、若干前屈みになっていた大きな身体はしゃんとして、苦しそうだった息づかいも普通に戻っている。

彼のようにイヴの体液を摂取し過ぎる行動は、フェンリルをはじめほとんどの魔物が一度は通るみちだが、シドほど早く快復したものはいなかった。やはり、身の内に秘めた力に関係するのだろうか。シドは、玄関の扉の前でようやく銀狼の背から降りたイヴの二の腕を掴むと、己の胸元へと強引に引き寄せた。

そうして、彼女の髪を恋人のように愛おしげに撫でながら、もう一度「名は？」と問うた。

「イヴだよ。でも、ご主人様と、お呼びなさい」

自分が家長だ、この家の主だ。居候する気ならちゃんと立場をわきまえなさい と、偉そうに薄い胸を張って言ったイヴに、その名を飴玉のように口の中で転がした男は、にこりと微笑んだ。

「イヴ……」

“にやり”ではなく、“にこり”である。

いっそ無垢なほどの笑みを浮かべて、シドはさも愛おしそうに彼女の名を口にした。

それは、彼のどこか退廃的な美貌を一気に爽やかにすり替え、年頃の乙女ならば頬を赤らめ胸を高鳴らせてしかるべき麗しさ。

しかし、普通の乙女からは少しばかり感覚がずれたイヴは、逆に胡散臭そうに眉をしかめただけだった。

そんなつれない態度に気を悪くする風もなく、シドは玄関の鍵を外して扉を開いたイヴに続き、家の中に足を踏み入れようとした。

しかし、前に行く彼女が扉を潜ったとたん立ち止まった。

何かあるのかと、視線を上げたシドの目に飛び込んできたのは、キラキラと輝く眩しい光だった。

「おつかえりーっ！ 待つてたー！ 寂しかったあー！」

そう叫んで奥から飛び出してきたのは、長くまつすぐなプラチナブロンドの青年だ。

彼はがばりとイヴを抱きしめると、さも愛おしそうに彼女の髪に頬擦りをした。

しかし??よくよく見ると、男の身体は透けている。

どうやら生身の人間ではないのだと、シドもすぐに気がついた。

「可愛い顔を泥で汚してどうしたの？ 相変わらずお転婆さんだね、僕のイチゴちゃんは」

「うるさい、ウォルス。イチゴちゃんって呼ぶな」

彼 ウォルスは、魂だけで肉体を持たない存在だ。

イヴが近隣の大きな町に買い出しに出掛けた時、たまたま目が合ったのがきっかけで憑かれてしまって、そのままこの家に居着いてしまっている。

町で迷子のように噴水の淵に腰掛けているウォルスを見かけた時、確かに一瞬イヴは彼を哀れんだのだが、関わり合いになるつもりは微塵もなかった。

しかし、イヴが“見える”ことに気づいたウォルスはしつこく、半ば根負けした状態で居候を許している。

身元が分かれば、さっさと家族の元に連れて行って成仏する手伝いくらいしてやるのだが、いかんせん彼もシド同様、己の名前以外

のことは何も覚えていないというのだ。

仕方なくそのまま家に置いてあるが、幸い彼に関しては食費も何にもかからないので、イヴには経済的な負担がないだけでした。そんなウォルスは、イヴの髪を撫でまくり、「イチゴちゃんイチゴちゃん」と連呼する。

それは、イヴの赤味があったブロンドに起因する。彼女のような珍しい髪色は、しばしばストロベリーブロンドと称されるのだ。

イヴはそんな甘ったるい呼び名はお断りだが、ウォルスに改める気配はない。

彼とうまく付き合うには、諦めが肝心だった。

ウォルスは一頻りイヴを愛で終わると、ようやくその後ろに突っ立っていた存在に気がついたようだ。

彼女のイチゴ頭越しにシドと目が合うと、そのブルーの瞳が飛び出すんじゃないかと思うくらいに見開いた。

さらには、ぱかんと顎が外れそうなほど口を開けたかと思うと、わなわなと背景の透ける身体を震わせて、叫んだ。

「いやあああー！ 僕のイチゴちゃんが、男を連れ帰ってきたああー！！！」

「うるさいってば」

間近で絶叫を聞かされたイヴは盛大に眉をしかめて、ウォルスをはたくように右手を斜めに振り下ろしたが、その手は虚しく宙を切った。

実に不公平な法則だが、ゴーストは物に触れることができるが、生身の者はゴーストに触れることができない。

イヴは常々、「一度でいいからウォルスを力一杯ぶん殴りたい」と、ささやかな望みを抱いていた。

「どういふことなのっ！ どういふことなのっ！！」

「うるさいな、ウォルス。重ねて言うな」

「何度でも言うよ！ 一体全体、これはどういふことなのっ！？」

シドを見たウォルスは、眦をつり上げてイヴに詰め寄った。

ウォルスも、普通にしていれば上品な美形で、身なりから見て生前はそれなりの身分であったのだろうと分かる。

しかし、とにかくイヴに関わると、彼はいちいち騒がしく極端だ。彷徨う魂は、よほど“見える”人間に飢えていたのだろう。

イヴから離れば、不安定な自分の存在自体が無に飲まれてしまふと恐れるかのように、ウォルスは彼女にこだわっている。

肉体を持たない分際で、毎日朝晩、イヴへのプロポーズを欠かさなくくらいだ。

「僕というものがあひながら、二人の愛の巢に男を連れ込むなんてっ！ イチゴちゃんの淫乱っ！」

「あーあー、うるさいうるさい。淫乱でも売女でも何でも好きに言えればいいよ」

「イチゴちゃんは売女なんかじゃないよっ！ まだピッカピカの処女じゃないのさっ！」

「じゃあ、淫乱でもないよ」

そんなウォルスをあしらうのに慣れたイヴは、ポケットに突っ込んでいた泥だらけの手袋を握って、家の奥へと足を向けた。

ウォルスのやかましさを気にも掛けず、家の中を物珍しそうに見回しているシドには、居間でも寛いでいるように勧めた。

「とにかく、土に塗れたからお風呂入ってくる」

「背中を流してあげるよ、イチゴちゃん」

「結構です フェンリルはおいで。一緒に洗ったげる」

土の中に埋っていたはずのシドはまったく汚れていなかったが、イヴとフェンリルはあちこち泥だらけだった。

ずるいずるいと、駄々をこねるウォルスを無視し、主人に呼ばれた銀狼は嬉しそうに尻尾を振りながら、彼女について風呂場に向かった。

その時、イヴは風呂場の扉に、一枚の紙切れを貼付けることを忘れなかった。

それは、以前村を通りかかった東の国の高僧が譲ってくれた、ありがたい護符である。

幽体のウォルスは、この家の中では基本あらゆる仕切りを通り抜けることができる。

遠慮のない彼は、風呂だろうとトイレだろうと断りもなく侵入してくるので、それを防ぐためにイヴは護符を重宝していた。

これを出入り口に貼ると、小さいながらも結界に守られた空間ができ、ウォルスが入ってこられなくなるのだ。

ウォルスは、しばらくの間浴室の扉に貼り付いて、切なげに「イチゴちゃんあん」を連呼していた。

しかし、中から水を流す音が聞こえ始めると、ぴたりと口を閉じて踵を返し、居間のソファに堂々と腰を下ろしたシドの前までやってきた。

そして、イヴに見せていた表情とはまったく別人のような顔で、シドと対峙した。

「貴様、何者だ。何を企んでイヴに近づいた」

青い目は氷のように冷たく尖り、赤い目の男を激しく睨みつける。ウォルスは二重人格なみに、イヴの前とその他の場面を使い分けしているのだ。

そんな彼の透けた姿を面白そうに眺めたシドは、口の端を引き上

げて答えた。

「俺が近づいたんじゃない。彼女が俺を地上に連れ出したんだ。責任をとるのが筋だろう？」

「ふざけるな　さては、貴様も化け物か」

「そういうお前も、化け物だろう？」

「私は肉体がないだけで、正真正銘の人間だ。もちろん、人間のイヴと結ばれていいのも、私だけだ」

「肉体がない時点で、じゅうぶん化け物の仲間入りだと思うが……」
シドは、沸騰しそうなほどの憎悪を抱いたブルーの瞳を見据え、小さくため息を吐いて続けた。

彼は自分が何者かも、なぜあのような森の中に埋められていたのかも覚えてはいないが、それ以外の知識に欠落はない。

フェンリルを見て自然と銀狼一族の存在を思い出したし、今シド自身を呪い殺しそうな目で睨みつける人間の亡霊が、魂として実に危うい状態であることにも気づいていた。

「悪いことは言わない。お前は早いところ成仏した方がいい。もうすでに、悪霊になりかけている」

人は誰しも、死ねば天に昇って全てを忘れ、また新たな命として生まれ変わる道がある。

しかし、この世に未練を残して成仏できぬ魂は、生きるものと同レベルに関わるほど、あるいは誰かを呪えば呪うほど　他の何ものにもなれずに淀みだけが増し、やがて意志も理性も失って、ただの悪霊と成り下がってしまう。

だが、そう忠告するシドに向い、ウォルスは一言「　余計なお世話だ」と吐き捨てた。

風呂場では、全身に泡をまとったイヴが、大人しくおすわりをしたフェンリルに石鹸の泡を塗りたくっていた。

白銀の毛並みは惚れ惚れするほど艶やかで、泡立ちがよい。

イヴは彼の前にしゃがみ込み、その両手両足すべての肉球まで、

ぶにぶにぶにとしつかりと洗ってやった。

「ところで、フェンリル。君は、どうして私にシドを掘り起こさせたの？」

早朝彼に起こされた時は、その真剣な眼差しから、今日のお宝は稀にみる大物に違いないと、うつきうつきしながらスコップを掲げて森に向かったというのに、結局見つけたのは何か厄介そうな訳ありの魔物であった。

大物には、違いはないだろうが……。

「実は、あいつが入ってた棺桶の方が、レア物だったとか？」

しかし、そうだとしたら、すでに蓋は粉々になってしまっているので、もう価値などないだろう。

フェンリルはただじっとイヴの目を見つめるばかりで、何も答えない。

彼は賢く上品な魔物であり、人外な力で時々すごいこともやってみせるが、残念ながら人語を操ることはなかった。

それでも、人間の言葉自体は理解していて、イヴにはどこまでも従順。

イヴの方も、彼の行動や瞳を見ればその思いはほとんど理解できるので、コミュニケーションに不便を感じたことはない。

けれど、時々。ほんの、時々……思うことがある。

「フェンリルと、話ができたらいいのにね……」

実は、イヴの育ての親であるカポ口婆さんは、フェンリルと言葉を交わすことができたのだ。

彼女は魔法らしい魔法は何も使いはしなかったが、動物や人語を操らない種の魔物とも意志の疎通ができる能力に長けていた。

幼い養い子にも、彼女はそれを伝授しようとしたのだが、残念なことにイヴにはその素質がまったくなくて断念したらしい。

「ばあちゃんと……一滴でも血が繋がってたら、君と話せたのかな？」

魔女の血は、女子にしか受継がれない。

カポ口婆さんの子供達は皆男子だったので、彼女が亡くなった時にラムール村唯一の魔女の血は途絶えてしまった。

幸い薬草の技術については、勉強としてイヴが習って受継いでいるし、お産の手伝いは助産婦が他に何人もいるから問題はない。

けれど、人智を超えた存在でもあったカポ口の喪失は、少なからず彼女を心の拠り所としていた村人達にとっては、痛手であった。

それを思うと、十分な後継者となれなかった自覚のあるイヴは、時々申し訳なさに胸が痛むのだ。

「……わふっ」

「ん……」

いつの間にか俯いていたイヴは、無意識に唇を強く噛んでいたようだ。

大人しく泡だらけにされていたフェンリルが、息を漏らすように小さく吠え、血が滲みかけた彼女の唇をぺろりと舐めた。

それにはっと我に返ったイヴは、目の前の銀狼の瞳を見つめる。

魔物の証の赤いそれは、しかし今は確かに彼女を気遣い、宥め癒そうとするような温かい光を宿していた。

「……ありがとう、フェンリル」

イヴはほっと安堵するような笑みを漏らすと、フェンリルに湯をかけて泡を落としてやった。

そうして、濡れた毛を解すように指で梳いてやると、彼の突き出た口の先をぺろんと舌で舐めた。

イヴの、魔物にとっては魅惑の味がかすかに口の中に広がって、

銀狼はごくりと喉を大きく鳴らした。

「ご褒美、前払いしとく」

イヴはそう言うと、控えめに唇を舐め返してきたフェンリルの舌に、そっと口内を許した。

唾液を浚うその感触に、イヴは少々身を強張らせたが、ほどほどを知っている忠実な下僕は、すぐに満足して舌を引っ込めた。

そうして、明らかにご機嫌になったフェンリルの前で、イヴは自

分の泡も落としながら宣言する。

「せつかく掘り出したんだから、シドにも何か仕事をさせよう」

「わん」

「シドは、君が推薦したようなもんなんだから、フェンリルが保護者ね」

「……」

銀狼は、見るからに「えー!?」という表情をした。

しかし、それについては微塵も譲る気がないイヴは彼を無視し、

「何がいいかなあ。何ができるかなー、あいつ……」と、すでにビジネスの算段に忙しい。

そんな主人に、フェンリルはいやに人間くさい仕草で、ふつつと深くため息を吐いた。

働く魔物

カリカリに焼かれたベーコンに、ふわっふわのオムレツ。

野菜がたっぷり入ったスープは、ミルクベース。

パンは昨日ご近所でもらったものだが、オーブンで焼き直されて、ふわふわのほかほか。

温められたポットからは、紅茶の芳しい香りが立ち上る。

小さな木の食卓の上には、温かい朝食が用意されていた。

「……ごはん」

「ああ、やつと出てきたか。冷めないうちに、食べよ」

濡れたイチゴ髪をふきふきしながらやってきたイヴは、絵に描いたような食卓を前に、呆然と立ち尽くしていた。

扉に背を向けて立っていたシドは、イヴに気づくと振り返り、つかつかと彼女の元まで歩いてきた。

そして、大きな手でわしゃわしゃと乱暴に濡れた髪を拭くと、ひよいと猫の子のように摘まみ上げて、彼女を食卓の椅子に座らせた。とたん、ふわんと料理のいいにおいが鼻腔を満たし、思わずイヴは頬を緩めた。

自然と口の中に溢れた唾液に、彼女がごくりと喉を鳴らすと、同席した魔物約二名も秘かにごくりと喉を鳴らした。

目の前の食卓に視線が釘付けのイヴと、イヴからもれる甘美な香りに夢中のシドとフェンリル。

食欲に支配されているそんな彼らをよそに、一人わなわなと身体を震わせるのは幽体ウォルスだ。

彼は透けた身体を踊らせて、食卓とイヴの間に割り込むと、彼女を抱きすくめて叫んだ。

「こらあ、イチゴちゃん！ そんな格好で男の前に出て来ちゃ駄目でしょ！」

「……うるさいなあ。ちゃんと服着てるじゃないか」

イヴの現在の格好はというと、脹脛までの丈のすとしたワンピース。

その下はショーツとキャミソールタイプの肌着だけだが、部屋着としては充分だろう。

けれど、自分はイヴにスキニシップ過多なくせに、ウォルスは貞操だの何だのと意外にお堅い。

魔物達のご褒美にと、キスで唾液を分け与える時も、彼が見ていない所ではないとうるさくてならない。

ちなみに、ウォルス自身は元々人間であるので、イヴの体液自体に過剰反応することはない。

「薄着過ぎだよ！ いいかい、たとえ一見羊のように穏やかに見える男でも、皮の下には狼を隠しているんだよ！」

「フェニー、かわいいねえ、かわいいねえ」

「こらー！ 真面目に聞きなさいっ！」

狼と聞いて、イヴがこれ見よがしにフェンリルを撫で回すと、ウォルスはさらにいきり立つ。

「ええいっ！ 言うこと聞かない子はお仕置きだよ お尻をぺろんと出さない！ 今すぐにつっ！」

そうして、強引に彼女のワンピースの裾を掴んだところで、イヴは眉間に深い皺を刻んでため息を吐いた。

「はい、うるさい。ちよつと消えてな」

そう言って、彼女はおもむろに側にあった紙を引っ掴むと、そこにさらさらと何かを書いて、ウォルスの額にペタツと貼付けた。

顔の前に引っ付いたそれを、目を真ん中に寄せて凝視したウォルスは、次の瞬間

「っ、いやあっ！ ひどいつ………広告の裏だなんてっ！ 月一
大特価のお知らせのチラシだなんてっ………！」

そう叫んで泣き崩れたかと思うと、突然どろんとその場から姿を消してしまった。

「何をした？」

側で一部始終を眺めていたシドは、ウォルスが消え失せた場所にひらひらと舞い落ちた紙と、その上に書かれた文字がじゅわわ……と蒸発するように消えたのを見て、不思議そうに尋ねた。

それに対し、もうウォルスのことなどすっかり忘れたように、食卓へ意識を戻して頬を緩めた少女は、シドを一瞥もせずに答えた。

「護符だよ、即席のね。真似っこして呪文を書いただけだから、効き目は一時間も保たないけど、少しは静かになるでしょ。」

呪文といっても、法力も魔力も皆無ないヴの文字では、効能が極端に限られてしまう。

それでも、この目の前の美味しそうな食事をいただく間くらいは、ウォルスに邪魔されずにすむだろう。

ちなみに、護符の文句は『家内安全』である。

イヴは改めて、食卓の上を眺めて、感嘆のため息を吐いた。

そうして、向いの席にどかりと座り込んだ魔物に、いささか興奮気味に尋ねた。

「シド。これ、あんたが？」

「他に誰がいる。しかし、お前は料理をしないのか？ 調味料が塩と砂糖だけしか見つからなかったが」

「しないよ。料理はどこから降って湧いてくるものだから」

「そんなわけあるか」

イヴは、薬草を調合するのは得意だが、スープを調合するのは苦手だった。つまり、料理がヘタクソなのだ。

育ての親のカポ口婆さんが、人外との対話の魔法同様、イヴにどうやっても伝授することができなかったのが、料理の腕だった。

カポ口自身は、村の奥様方相手に料理教室を開くほどの達人だったというのに。

彼女が亡くなった今、イヴは腹が空けば自分で何とかしなければならぬ。

大きな街ならばバザールも盛んで、大衆食堂で三食済ますという手もあるが、ラムールのようなこんな田舎の村では、商店は小さいのが一個あるだけで、小料理屋さえも存在しない。

けれどイヴはこの一年、飢えることも、自分の作ったまずい飯を食べることもなかった。

なぜなら、彼女の料理下手をよく知っている村人達が、毎日交代で食事に呼んでくれたり、総菜を分けてくれたりするからだ。

そうして、村人総出でイヴを甘やかしてきた結果、彼女の料理の腕はまったく上達しないのだった。

しかし、料理上手のカポ口婆さんに育てられ、村中のお袋の味を食べてきたイヴは、無駄に舌が肥えている。

そんな彼女を、今朝土の中から掘り起こされたばかりの魔物が作った料理が唸らせた。

「うんまい　！」
「当然だな」

カリカリベーコンの美味さは、燻した肉屋のおじさんの腕が大きい、ふわふわオムレツを作るのは至難の業だ。

卵の熱の入り具合を見極める目が必要だし、フライパンのへりを利用して返し、空気を含ませつつふわっふわに焼き上げるのは容易ではない。

しかも、絶妙な塩加減で卵の甘さが引き立ち、口の中には旨味が瞬時に広がった。

スープには、細かく刻んだ野菜が煮込まれていて、ミルクのまろやかさと相俟って、実に優しい口当たり。

イヴの記憶が正しければ、ろくに使わぬキッチンにはくず野菜が少し残っていただけのはず。

それからこんな美味しいスープが出来上がるとは、彼女にとっては何よりも驚きの魔法であった。

「よし、決めた。シドを我が家の料理係に任命する　　いいよね、フェンリル」

「わふっ」

イヴは、まだ毛が半乾きなフェンリルを側に呼び寄せ、一口大に切ったオムレツを彼の口に放り込みながら、そう相談した。

もちろん、よっぽどのことでもない限りは常に彼女に従順な銀狼が、頷かないはずがない。

そうして、新入りの魔物の役割があっさり決まったわけだが、直接の打診も何も与えられないシドは、「ん？」と首を傾げた。

「おい、まで。なぜ俺にではなく、その銀狼に確認する？」

「君は、フェンリルの手下だからね」

「いつの間に、そうなった」

「風呂の中で、そうなった」

「……」

答えるイヴは料理に夢中。

シドに訝しげな視線を向けられたフェンリルは、すました顔で彼を無視した。

「……まあ、料理は嫌いではないから、構わないが」

「調味料とかいるものがあるなら、君の独断で揃えたらいいよ」

役割が決まったシドは、家長イヴの中で“あんた”から“君”に昇格した。

「そうだな。さすがに砂糖と塩だけでは心許ない」

ラムール村唯一の商店は小さいが、村中の需要に対応するために商品の種類は充実している。

イヴとシドは、朝食が済んで一服したら、一緒に買い物に行こうという話に落ち着いた。

居候させると決まった以上、いずれ知れることだから、村人達にもさっさとシドの存在をカミングアウトした方がいい。

イヴは彼を引き連れて、顔見せ行脚も兼ねることにしたのだ。

「エプロン買ってあげるよ、シド。ふりふりの、新妻がするみたいな可愛いやつ」

「そんなものはいらないが、違う褒美なら欲しい」

シドはそう言うと、ご機嫌でパンを頬張っていたイヴの顎を、指先でちゃんと摘んだ。

それだけで彼の意図を察したイヴは、口の中のものをもぐもぐ咀嚼して飲み込むと、冷たい水を一口ごっくんしてからため息を吐いた。

「はいはい、どうぞ。でも……」

「分かっている。ほどほどに、だろう？」

「……そう、ほどほどに、だよ」

そうして、シドはイヴの頬に掌を添えて、そっと彼女の顔を上に向かせた。

緩く解けた唇を柔らかく啄み、彼女の舌に自分のそれを擦り付ける。

しかし、シドの方が随分背が高いので、そのままでは唾液が流れるのはシドからイヴにだ。

それを逆転させるために、シドは椅子に座らせたイヴの前に跪き、椅子ごと彼女を抱きしめるようにして、下からその唇を吸った。

とたんに口内に広がる甘美な味わいに、彼の頭の奥がとろりと蕩け、一瞬思考が甘い色に染まる。

そんな主人と新入りの魔物の姿を、傍らの銀狼はベーコンの塊を牙で噛みちぎりながら、じっと見つめていた。

身に余る注作品

「シド、脱ぎな」

「……お前、何でも唐突すぎると言われなかい？」

ため息を吐いて返したシドの言葉に、イヴは「よく言われる」と胸を張って頷いた。

美味しい朝食を腹一杯平らげると、イヴは上機嫌で洗面所に歯を磨きに行った。

その間に、シドは手早く食卓の上を片し、洗い物まで済ませてしまった。すでに立派な家政夫である。

そうして、出掛けるために着替えてきたイヴは、シンプルな七分袖チユニックとレギンスにぺたんこのパンプスと、実にラフな格好だ。

対してシドは、棺桶から出てきてまだそのままの服装。

黒いパンツに黒い上着。しかし、上着に施された銀系の刺繍は精巧で、一目で高価なもの分かる。

大きな祝い事や祭事以外で、このようにフォーマルな格好をする者は、少なくともラムール村にはいないだろう。

つまり、そのままの格好でシドが出掛けると、場違いというか悪目立ちし過ぎるに違いない。

しかし幸い、彼は下に白いシャツを着ていたし、パンツの方には過剰な刺繍は施されていなかった。

上着を脱げば、普通の格好にも見えそつだ。

それに、何とか及第点を与えたイヴは、床に落ちたままだった紙を拾い上げた。

先ほど、口やかましいウォルスを追い払うために護符代わりにした、あのチラシだ。

「ちょうど今日が、月一の特価の日でよかった。運命を感じるよね」
「安っぽい運命だな」

イヴは、一頻りチラシに目を通してテーブルに置くと、お気に入りのでっかいがま口ポーチの財布を斜めがけして、「いくよ」と一言声をかけた。

その声に引つ張られるように、シドとフェンリルは自然と足を踏み出した。

「……」

その時シドは、何の戸惑いもなく彼女の言葉に従おうとする我が身と、それをまったく不快に感じない自身の心に、ふと疑問を抱いた。

自分が何ものであるのかは忘れてしまったが、自分の身の内に膨大な魔力があるのは分かる。

人間の小娘一匹、小指の先ひとつで擦じ伏せてしまえるだろう。突然成り行きで決まってしまった主従の立場を、逆転させることなど容易いはず。

イヴの身体を満たす魅惑の蜜を、好きな時に好きなだけすするとも、シドには至極簡単なことだ。

それなのに、彼女の言葉に耳を傾けてしまう。小柄な姿を目で追っってしまう。

彼女を言ばせたいと 笑顔をみたいと思ってしまう。

頼まれもしないのに、料理の腕を奮ったのは何故だろう。

これはもしか、彼女の体液を不用意に口にしてしまった副作用であらうか。

イヴに逆らえないのも、構ってもらいたくて仕方ないのも、キスしたくてたまらなくなる、この思いもすべて。

シドは傍らの銀狼を見下ろし、彼もまたそんな気持を抱いているのだらうかと思うと、何か少しだけ胸がもやっとなって眉をしかめた。

視線を前に戻すと、さっさと扉に向かったイヴが、それを開こう

としている後ろ姿が見えた。

幽体の男がイチゴと称したストロベリーブロンドは甘やかで、さりりと背の中程まで流れている。

シンプルだが明るいい色合いのチュニツクと暗色のレギンス、艶やかなパンプスは年頃の娘らしくてよく似合っていた。

（見た目は、まあ可愛らしいのだな……）

シドは素直に心の中で彼女を褒めたのだが、しかし次にくるりと振り返った少女は、あまり可愛らしくないことを言った。

「十八の身空で、こんな大きな男を飼うことになるとは思わなかった」

「おい、せめて養うと言え」

太陽は山際から飛び立って、もうすぐ空の天辺に到達しようとしている。

ラムール村の遅い朝支度もようやく落ち着き、村人達は思い思いにのんびりと過ごしていた。

この村の特産はムールという名の穀物である。それにちなんで、村名がラ・ムールになったと言われている。

ムールは麦よりは米に近く、栽培には多くの水が必要とするが、村の真ん中を大きな川が流れており、その上流である山の頂きには巨大な湖があるため、地理的にも栽培に適している。

気候にも恵まれているため、よほどのことがない限り毎年収穫量は一定しており、人々の生活も安定していた。

たった一軒の商店は、村の真ん中あたりに建っていた。

経営者は、村長の息子であり、イヴの幼馴染みロキの父親である、エヌーおじさん。

最近頭上がめつきり寂しくなつて、帽子が手放せなくなつた彼は、開きっ放しの店の扉からひよっこりと顔を覗かせたイヴに、「よっ」と笑顔で片手を上げた。

「イヴちゃん、ちょうどよかった。注文してたやつ、届いてるよ」

「あ、ほんと？ おっちゃんありがとう」

エヌーの店は食料品から衣料品・文房具にいたるまで、生活に必要なものはだいたい何でも置いてあるが、何しろ小さな商店なので品数はそれほど豊富ではない。

特に衣料品に関しては、自分のサイズと好みを満たすものを手に入れようと思えば、自ら近隣の大きな街に買い物に行くか、あるいはエヌーの店においてあるカタログで注文して、仕入れてもらう必要がある。

エヌーの店は一族で支えられていて、彼の弟夫婦が月に一度大きな街に仕入れに行くので、注文品もだいたいはその時入荷されることになる。

実はイヴがウォールスを拾ったのも、彼らの馬車に便乗させてもらって、近隣の街に遊びに行っていた時だった。

ちなみにラムール村では、イヴ以外にはウォールスが見える人間はいない。

昼前の混雑には少し早い時間。

商店にはイヴ達の他に客はいなかった。

フェンリルは獣の我が身をわきまえて、店内には入らず店先で大人しく座っている。

イヴはそんな銀狼の頭を撫でると、シドを引き連れて中に入り、料理に必要なものを適当に選ぶように命じた。

「っ！？」

すると、奥からイヴの注文した商品を持ってきたエヌーは、シドを見るなりぴきりつと固まった。

「エヌーおじさん？」

ここまで来る道すがら、イヴは何人かの顔見知りとすれ違った。シドを見た彼らは一様に「イヴちゃんに男ができたっ！」と騒いだ。彼女が「新しくうちに居候することになった魔物だ」と説明すると、今度は「イヴちゃんにヒモができたっ！」と大騒ぎになっ

た。

ところが、「こう見えても、料理がうまいんだ」と紹介すると、
一同いやに納得したように頷いた。

硬直したエヌーの手から、イヴが注文していた商品がはらりと落ちた。

彼女よりも近くにいたシドがそれを拾い上げてみると、丁寧に包まれて中身は見えなかったが、包装紙に商品がわかるようにメモ書きが付いていた。

『ブラジャー（Eカップ）イヴ』

「Eカップって……お前、いくらなんでも見栄をはり過ぎだろう」

「そんな虚しいことをするかっ！ 着けるのは、私じゃないんだよっ」

イヴは、自分の憤ましい胸元を眺めて哀れむように言ったシドに吠えると、彼の手から商品を奪い取り、いまだ固まったままのエヌーを揺さぶった。

「おじさんっ、エヌーおじさんってば！ しっかりしてよ」

「イ……イヴちゃん。か、か、か、彼は一体……？」

やっと瞬きしたエヌーは震える手でシドを指差したが、彼は気を悪くするふうもなく、店内の物色を始めた。

イヴは先ほどの道すがらの遣り取りを再び繰り返すのが面倒だったので、一気に最後の答えを口にした。

「シドっていつの。今日からうちの料理番。時々ここに買い出しに来ることになると思うから、よろしくね」

「料理番！？ あ、そ、そーか、そーか！ ビジネスライクな関係なんだねっ！？」

「まあ、そうだね」

「そーかそーか、ははははは……」

うら若き乙女が連れてきたのが、目を見はるような美貌の赤い目の男。つまり魔物であったというのに、彼を料理人として家に置くと言つと、村人達は一様にシドの存在を歓迎した。

彼女の食卓を守る専属の者が現れたことに、よほど安堵したのか。それほど、イヴの料理下手は度を超えていて、もう誰も改善の余地があるとも思っていないのだろう。

「いやあー……おじさん、ヒヤツとしちゃったよ。イヴちゃんに恋人ができたのかと思って」

エヌーもまた、彼女にちゃんとご飯を作ってくれる人物が現れたことは、歓迎する。

ただ、せめて女性であればよかったのに……

そう思いながらこぼした彼の言葉に、イヴは不思議そうに小首を傾げた。

「なんで私に恋人ができるか、エヌーおじさんがヒヤツとするの？」
そういう打算のない仕草をする時は、彼女は本当に幼い少女のようで、彼女をおいて逝かなければならなかったカポ口婆さんの心配を思うと、エヌーも胸が痛んだ。

彼はかすかに潤んだ瞳を手の甲で擦ると、「いやいや、こっこの話だよ」と誤摩化す。

エヌーの秘かな野望は、イヴを一人息子の嫁に貰って、二人にこの店を継がせることだった。

彼の十九歳になる息子のロキが、幼馴染みであるイヴをずっと好んでいることを知っていたのだ。

だから、突然現れたシドという存在は、エヌーに複雑な思いをもたらした。

一方、自分のことを話題にされていると知ってか知らずか、イヴとエヌーから離れて店内を見て回っていたシドは、しばらくするといくつか商品を抱えて戻ってきた。

どうやら、すべて料理に使う香辛料の類いのようだが、料理は出来上がったものにしか興味のないイヴには分からない。

「なにそれ、シド。薬草でも煮るの？ 毒薬でも作るの？」

「煮るのは肉と野菜で、作るのは料理だ。ちゃんと食べるものを作

ってやる」

褒美をもらいたいからな

そう耳元に囁いて、ニヤリと犬歯を覗かせたシドを無視すると、イヴはお気に入りのがま口財布ポーチを開いた。

そうして、先ほどのEカップブラジャーとともに、彼の選んだ商品を清算した。

君が好き

「そういえば、イヴちゃん。例の放蕩息子、また来てるよ」

「またあ!？」

清算した商品を袋に詰めながら、エヌーは思い出したように口を開いた。

彼の言う「例の放蕩息子」とは、ラムール村を含め周辺の五つの地を治める領主、シュザック家の末息子ハグバルドのことだ。

領主シュザック候はとても人徳のある方で、五つの町村の自治を尊重しつつ、それぞれの長との連携も怠らない。

しかし、末の息子は彼が随分年老いてからできた子供で、だいぶと甘やかして育てられたらしく、二十歳になった今でも仕事もせず毎日ぶらぶらしている。

そんな彼が、ラムールのような田舎の村に何の用なのかというと

「また、アグ姐さん口説きに来たのかな……」

「それ以外に、ここに来る理由はないもんねえ……」

アグ姐さんことアグネは、イヴの側にいる魔物の一人だ。

そして、エヌーに取り寄せしてもらった、Eカップブラジャーの依頼主でもある。

アグネは、とある事情というか特性上、イヴの家の中には住めないで、すぐ側の別の場所を住処としている。

そしてそんな彼女に、ハグバルドは激しくご執心なのである。

「ってことは、やっぱりうちにも来るよねえ……」

「だろっねえ。例にもれず、村に滞在中はうちの実家　村長宅に宿泊するらしいけど、イヴちゃんの所にまた入り浸ることになるだろっねえ」

「いやだなー、面倒だなー。また、アグ姐さんへそ曲げるだろうし」
領主の息子からの猛アプローチにも、魔物のアグネは靡かない。
それどころか、ハグバルド自身をひどく毛嫌いしているので、彼
が来ると一悶着も二悶着も必ずあって、わずらわしいのだ。

けれど、彼は金持ちの親のすねをかじっているので資金は潤沢。
ラムール村に来る度に、エヌーの店にも大金を落としていく上客で
ある。

世話になっているエヌーのためにも、イヴもあまりハグバルドを
邪険にはできないのだ。

「まあ、無理してアグネさんを連れ去る勇気もないだろうし、その
うち諦めて引き上げるだろうさ。イヴちゃんも営業スマイルで頑張
って。 あ、これ、ニンジン。新鮮なのが入ったから持って帰っ
て」

「わ！ ありがとう、おじさん。ニンジンきらしてたの、忘れてた」
エヌーは大きな袋いっぱい、ニンジンを詰めて渡してくれた。
イヴが無類のニンジン好き、というわけではない。

これもまた、彼女の家に居候する、とある魔物にくれてやるのだ。

荷物を受け取って店の外に出ると、フェンリルが待ちくたびれた
ように立ち上がっていた。

イヴが「お待たせ」と言って額を撫でてやると、銀狼はくうんと
甘えた声を上げたが、彼女が思い出したように「ハグバルドがまた
来るよ」と言うと、鼻面にぎゅっとしわを寄せた。

放蕩息子は、銀狼にも評判がよろしくないらしい。

「つ……イヴっ!？」

その時、背後から大きな声がかかった。名を飛ばれたイヴと、フ
エンリルと荷物持ちになったシドも振り返った。

後ろに立っていたのは、若い男だ。

軍服のようなかつちりとした詰め襟の制服と、制帽。

立派な腕章は、ユングリング国家治安庁に属すことを示し、直属の上司である領主シユザツク候より任命されたラムール村唯一の保安官。

エヌーの一人息子で、村長の自慢の孫。そして、イヴの一つ年上の幼馴染みでもある、ロキだ。

彼はヘーゼルの瞳をこれでもかというほど見開いて、イヴ達を凝視していた。

しかし、腰に帯びたサーベルががちゃりと立てた音にはつと我に返ると、ロキは今度はじろじろとシドを見てから口を開いた。

「イヴっ、彼は何者だ？ 村の外から客人がある時は、署に届けを出しておけって言っただろう！」

小さな村の治安を守るため、ラムールの保安官は代々外から入ってきた人間には注意する。もちろん出入りは自由だが、最低限名前と身分は確認している。

「だって、客じゃないから。人間でもないし」

「なに？」

ただし、それはユングリングに戸籍を持つものだけ つまり、魔物は管轄外だ。

シドの魔物の証である赤い目を確認したロキは、額に青筋を立てて幼馴染みを怒鳴りつけた。

「お前っ、またわけの分からないもの拾ってきてっ！！」

「私のせいじゃないよ、フェンリルが見つけたんだもんっ！」

そんな彼に反論しつつも、イヴはフェンリルを盾にした。

「フェンリルっ！！」

「……」

熱くなつたロキは銀狼をも怒鳴りつけようとしたが、詰め寄った顔をふさふさの白銀の尻尾でべしりと叩かれ、「うっ……」と呻いて後じさつた。フェンリルの尻尾の毛並みは、意外に堅い。

ロキは制帽を脱いで、苛立ったように亜麻色の短髪をかき上げた。精悍な顔立ちは、大きな町を歩けば女子達が視線をよこすほど整っているが、今は盛大にしかめられてそれも台無しだ。

彼は、自分を落ち着けるように大きくため息を吐くと、極力冷静を心掛けてイヴに問うた。

「……その魔物、どうする気だ」

「もう拾っちゃったから、仕方ないからうちで飼うことにした」

「飼うって、お前……！ 一人暮らしの女の家で、男を住まわせるなんて……！」

ロキの装った冷静は一分も保たずに崩壊し、ついに剣に馴染んだ彼の大きな掌が、イヴの両肩を掴んだ。

その華奢な感触と、咎めるように銀狼の後ろ足に脛を蹴りつけられて、掴んだ手に力を込めることはなかったが、愕然とした彼の手は震え、顔色は真っ青だった。

しかし、そんな相手の衝撃や動揺にはおかまいなしのイヴは、「だって、フェンリルが認めたんだし、悪いことはしないよ。それに、料理が上手いんだ」

と、どこまでもものん気に答えた。

結局ロキは、他の村人達のようにただの料理人としてシドを受け入れはしなかった。

しかし、「溝に荷車の車輪が嵌って動けない」と、近所の爺さんが助けを求めにやってきたので、後ろ髪引かれる様子ながらイヴ達と別れた。

「仕事が終わったら、家に行くからな！」

そう言い残して行ったので、夕刻にはまたやかましく言うてくることだろう。

件の領主の放蕩息子も遅からずやってくるだろうし、今日はまたいろいろ面倒なことになりそうだ……と思いつながら、イヴはとりあ

えず一度家に帰ることにした。

そんな彼女の横を歩きながら、ロキがいるときは一言も発しなかったシドが、おもむろに口を開いた。

「あの保安官、お前のことが好きなんだな」

何を言い出すのかと思えば、ラムール村いち有名な好き好きベクトルの話だった。

「幼馴染みだからね。私も好きだよ、ロキのこと。一緒に遊ぶと面白い」

ただし、ロキからのベクトルの先であるはずのイヴは、少々思い違いをしているようだが。

「……………そういうことではなくて」

「ん？ なに？」

シドは、幼いというか鈍いというか、とにかく男女の恋愛にはひどく疎いらしい少女を無言で眺めた。

不思議そうに瞬く茶色の瞳には愛嬌のある。

彼はそれを見下ろしつつ、けれど「いや、いい」とかぶりを振った。

報われぬ保安官を哀れと思いながらも、シドの顔に浮かんだのはにやりとした笑みだった。

「イヴ、銀狼のことは好きか？」

「フェンリル？ もちろん、好きだよ」

イヴは即答だ。そして、フェンリルは「当然だ」とばかりに、すました顔をしている。

シドはそんな彼らに目を細めると、問いを重ねた。

「そうか。では、うまい料理を毎日食べさせれば、俺のことも好きになるか？」

「なに、いきなり……………」

そんな突拍子もない質問に、さすがにイヴは立ち止まってシドを見上げた。

「シドは、私に好きになられたいの？」

「どつやら、そうらしい」

「……ふーん」

魔物の瞳には魔力が宿っている。

シドの赤い瞳は魅惑的に輝いてイヴを見つめたが、しかしイヴの素っ気なさが変わることはない。

それが余計面白いのか、シドはさらに笑みを深めた。

「で、どうだ？ 好きになるか？」

「まあ……なるかもしれないね」

「そうか」

イヴの答えを聞いて緩んだ笑みを浮かべたシドの腿を、足元の銀狼の若干堅い尻尾が、べしりと叩いた。

シドは「調子にのるな」と叱られたような気がしたが、それを含めてひどく愉快的な気持ちになった。

「しばらく、退屈せずに生きることができそうだ」

化け物屋

イヴは、やたらと動物に懐かれる。

荷引きの馬に会えば「撫でれ」と長い鼻面を擦り寄せられ、牛にはもうもう鳴いて頬ずりされる。

犬は尻尾を振って寄ってきて、猫はフェンリルを警戒しながらも、そつと足元に擦り寄っては去っていく。

小鳥は、彼女のストロベリーブロンドの髪がお気に入り。

ちゅんちゅんと啄んでは肩に侍り、ごくたまにプリツとありがたいくないお土産を残していくのは困ったものだ。

さらに、イヴに群がるのはなにも動物だけではない。

ユングリングという国には魔物が多く住まい、ほとんどは人間との共存を果たしている。

特に矮小な魔物は小動物とほぼ同じ扱いで、彼らもまたイヴに懐く。

カポ口婆さんが残してくれた家の手前には、清らかな水をたたえる泉があつて、その周辺にも多くの小さな魔物が住んでいる。

早朝シドを掘り起こして帰ってきた時と、先ほど出掛けに通つた時は、彼らは遠巻きに眺めるばかりで近寄ってはこなかった。

おそらく、見慣れぬシドの存在と、彼の持つ魔力に警戒して様子をうかがっていたのだろう。

しかし、イヴがまた彼を伴って帰ってきたことから、シドが彼女に認められた存在と理解したのか、魔物達は今度は我れ先にと集まってきた。

小さな魔物達は、無闇にイヴにキスをねだったりはしない。

確かに彼女の体液は魔物にとっては魅力的だが、それは嗜好品というよりは麻薬に近い。

身体の小さいものには刺激が強過ぎ、わずかな摂取であっても今朝のシドのように、二日酔いのような状態になってしまう。

だから、イヴはよっぼどのことがないかぎり彼らにキスは与えないし、彼らもまた弁えていた。

魔物達が特別な報酬を要求し、イヴがそれに応えるのは、互いの間で雇用関係が成立した時だけである。

「こんな小物どもに、何か仕事ができるのか？」

「できるよ、実に平和的なね」

例えば、保養所や病院への慰問。

小さな魔物達は可愛らしい姿をしているものも多く、それでいて動物よりはイヴの言葉を理解しやすく従順である。

特に、美しい羽根をもったピクシーなどは最適だ。

魔法で花を咲かせたり降らせたりもできて、小児病棟の慰問の際には、病でベッドから離れられない子供達を一時喜ばせた。

??イヴは、自らの稼業を『化け物屋』と称する。

自分の元に集う魔物達を用い、依頼主のニーズに応える“何でも屋”だ。

イヴと魔物の間には、契約書を交わすなどという確たる雇用関係が存在するわけではないが、人間との共存を望む魔物達が人間の世界で仕事をするための窓口として、化け物屋はいわば芸能プロダクションのような位置付けにある。

依頼主からは、イヴに報酬が支払われる。魔物が人間の金銭を望めば、その報酬からイヴが支払うのだが、彼らが欲しがるのは大体彼女のキスだけだったりする。

また、化け物屋の料金設定は、少々お高めである。

いや、使う魔物の大きさに比例して、料金が上がるという方が正しいか。

つまり、先に述べた慰問などの場合は、小物の魔物を連れていくだけなので料金は安い。ほとんどが移動費と滞在費で消えるような額であり、イヴも半分慈善活動に近いつもりでやっている。

この場合、イヴに必ずくつついていくフェンリルも営業を行うわけだが、彼の仕事は基本サービス扱いになる。

対して、大物の魔物を入り用なのは、大体は金を持っている連中だ。

魔物は身体の大きいもの 魔力の強い者ほど、容姿が美しい。

シドのように人間に見紛うような容姿で、飛び抜けた美貌の魔物もいれば、動物に近い形ながらも稀少で美しい姿をした者もいる。

金持ちどもは、パーティや商談の際に彼らを側に侍らせ、自分に箔をつけようとする。

あるいは、特別なオブジェの一つのように、会場に飾って彼らを見せびらかし、権力を誇示しようとするのだ。

もちろん、金持ち達の中には、幾らでも金を出すからいつそ魔物を譲ってくれと言い出す者も少なくはない。

しかし、大人しく従順なふりをしていても、魔物は魔物である。

彼らはイヴが仲介するから仕事をこなすのであって、彼女以外の人間の元に下ることをよしとしない。

さらに、実はイヴの稼業には後ろ盾が存在する。

ラムール村の領主でもあるシュザック候が発行した、商売をするための正式な許可証だ。

それが、無理を通そうとする連中から化け物屋を守り、操業を援護してくれている。

カポ口婆さんとも親交が深かったらしいシュザック候は、魔物に対する理解も深く、残されたイヴのこともたいへん気にかけてくれていた。

化け物屋の、最初の客になってくれたのも彼である。ご祝儀も気前良く、たいそうはずんでくれた。

周辺領主を集めての会合のおり、シュザック候はイヴに美しい魔物を一匹連れてくるように命じ、他の領主連中にも『化け物屋』を宣伝してくれたのだ。

その時、シュザック家に同伴した魔物というのが、Eカップブラ

ジャーをご所望のアグ姐さんことアグネである。

そして、候の末の息子ハグバルドもその時、彼女に心を奪われたのだった。

「アグ姐さんは、世界一の別嬪だからね。一目惚れするのも分からなくはないよ」

「何の魔物だ？ その、アグネというのは」

「今から会わせてあげるよ。このブラ、渡さなきゃいけないし」

「お前には、宝の持ち腐れのそれな」

「……」

ニヤリと笑って失礼なことを言う料理番の鳩尾に、イヴは躊躇なく拳を叩き込んだが、割れた腹筋に跳ね返されただけだった。

その感触に目を見開いてぱちくりした彼女が面白かったのか、シドは声を上げて笑った。

それをぎんつと睨み上げたイヴは、ふんつと彼から顔を逸らすと、突然泉に向かって大声を上げた。

「ねーさああん！ アグ姐さん！」

「おいおい、ここにいるのか？」

「ここにいるんだよ この、泉の中にね」

アグネは、水棲の魔物である。彼女は、水がなくては生きてはいられない。

住処としているこの大きな泉は、イヴの家の前にある小さな池と水中の洞穴で繋がっていて、容易に行き来ができるらしい。

「……出てこないな」

「……出てこないね」

今朝は池の方には姿を現していなかったもので、こちらの泉にいらるだろうと思っていたが、何度イヴが呼んでもアグネは姿を見せなかった。

その代わりに、泉に住む魚やら山椒魚のオバケのような魔物やらが反応して、水面に顔を出してパクパクし始めたので、イヴはポケットに忍ばせていたパンくずを与えて解散させた。

そうこうしている間も、肝心の魔物が出て来る気配は、やはりない。

「そういえば、昨日の夜は満月だったな。 フェンリル、アグ姐さんに会った？」

「……わふ」

満月の夜は、魔物は最も開放的になる。

普段はイヴのベッドの傍らで眠るはずのフェンリルも、夜遊びに出掛けたくらいだ。

おそらく、アグネも大人しく泉にこもってはいなかっただろう。

イヴは片手に掲げたブラジャーの包みをじっと見つめると、何とか決心したように大きく頷いた。

「よし、釣ろう」

そう言うと、彼女はおもむろに己の左手の中指の先を、がじりと歯で噛み切った。

「 がうつ！」

「 おいっ！」

それを見たフェンリルとシドは、ぎよっと目を剥いた。

彼らは同時に咎めるような声を上げたが、イヴは少しも気にかける様子もなく、かすかに血が滲んだ指を泉の中に突っ込んだ。待つこと数秒。

バシャンッ……

イヴが狙った通りの、大きな獲物が掛かった。

「はああ、生き返るわあ〜。二日酔いには、やっぱりイヴね〜」

「痛いよ、姐さん。ちゅーちゅーし過ぎだよ」

「あらあ、ごめんあそばせ」

血の滲んだイヴの中指に吸い付いてきたのは、紅をひいたように

魅惑的な唇だった。

それと同じ色合いの赤い瞳は魔物の証。

透き通る白銀の髪と白い肌、下半身は真珠色の鱗を持つ魚の形をしたアグネは、最も美しい魔物の一種　人魚だった。

彼女はラムールを流れる大きな川の上流、その水源たる山頂の泉に住まう人魚族であったが、とある理由により下流に下り、イヴに保護されて今に至る。

「なるほど……たしかに、先ほどの注文品はコイツの物だな」

「失礼だよ、料理番。初対面の女子の胸をじろじろ見るなんて……」

イヴの指先を名残惜しげにぺろんと舐めた人魚は、抜群のプロポーションを誇る。

腰はきゅっとくびれて細く、円やかな胸をより豊満にめりはりある姿態に見せる。

包みから取り出されたEカップブラジャーと見比べ、シドが納得したように頷くと、イヴはそんな彼を半眼で見上げた。

対してアグネの方も、イヴの側に見知らぬ魔物がいることに気づき、片頬に手を当てて首を傾げた。

「まあイヴ、どなた？」

「今朝、森の中に埋まっていたのを掘り出してきたんだよ。シドっていうんだけど……アグネさん、何の魔物か知らない？」

「さあ？　でも、相当高位の魔物のようではあるわね。素敵なひとじゃない、イヴ　わたくしの好みではないけれど」

アグネはそう言つと、「えら呼吸のできないような男は、ごめんだわ」とにつこり微笑んだ。

「私……えら呼吸のできる人には、まだ会ったことがない」
「俺もない」

イヴとシドの言葉に、足元の銀狼も同意するように頷いた。

満月だった昨夜、魔力の強まったアグネは、魚の下半身を人間の足に変化させて地上に上ったらしい。

ラムール村には遅くまでやっている店がないが、いくらか大きい

隣町に行けば酒場があつて賑やかだ。

美しいアグネが顔を出すと、男達はこぞつて彼女に酒を驕りたがった。

相手が魔物と分かっているにもかかわらず、ユングリングの酒場の男達は構いはしない。

そうして人の姿をした人魚は、一夜限りの逢瀬を楽しむ時もある。ただ酒に溺れて翌朝に酒精を残す時もある。

今回は、どうやら後者だったようだ。

アグネは「ううん……」と悩ましく唸って、こめかみを揉んだ。

「ああん、だめえーイヴう。まだ頭が痛いわ、もう一口ちょうだい」

「もう、血は止まつちやったよ」

「じゃあ、キスさせて」

おかしな会話であるが、これがイヴと魔物達の日常である。

アグネは岸边に手をつけて、ざばりと腰までを水面から突き出すと、自然な仕草でしゃがんだイヴの唇に吸い付いた。

鱗と同じ真珠色の爪を携えた白い手が、少女の甘い色合いのブロンドに差し入れられる。

「……」

それを背後で見守っていたシドは、なんとなく面白くない気分になった。

そして、ちゅっと　おそらく互いの舌が絡まって立てたであるう濡れた音が聞こえた瞬間、それはかすかな不快から確かな苛立ちへと変化した。

己の欲望に忠実であるこそが、魔物の性分。いかに理性を持つ高位の魔物であろうと、それは変わらない。

シドはその苛立ちの正体を探ることもなく、荷物を持たない手を伸ばして少女の二の腕を捕まえると、強い力で後ろに引いた。

「わっ……！？」

当然、思いがけず引つ張られたイヴの足元は不安定になり、よろけて後ろに倒れそうになった。

しかし、彼女をそうした犯人であるシドが背後にいて、彼の胸元にすっぽり収まることで、転ぶのは免れた。

「何よ？ シド」

「……いや」

不思議そうに茶色い瞳をぱちくりさせたイヴに、シドは言葉を濁したが、その腕はさりげなさを装って彼女の腹に回された。

一方、今度は面白くないのはアグネである。

「ちょっと、あなた。どういっつもりかしら？」

美味しい少女を取り上げられた人魚は、どこかのんびりと優しげだった表情を一変し、眦をつり上げてシドを睨んだ。

それに対し、シドの方も唇を笑みの形にしながらも、凄みを含んだ視線を返す。

「どうもこうも。あんたがイヴに酔いすぎぬよう、加減を手伝ってやっただけのこと」

「余計なお世話よっ！」

そうして、イヴを挟んで睨みあう二匹の魔物。

火花を散らす彼らの間に、見兼ねたように割って入ったのは、銀色の獣の形をした魔物だった。

悠然と足を進めたフェンリルは、主人の少女を抱き込んだ男の手に噛みつき、泉から身を乗り出す人魚の顔をふさふさの尻尾でべしりと叩いた。

「おい、遠慮なく噛むな。穴が開いた」

「いやん、フェンリル。あなた、尻尾の毛を手入れしなさいっ」

文句を垂れる魔物どもを鼻で笑うように、ふんつと息を吹いたフェンリルは、シドの手から解放されたイヴを促し己の背に乗せると、スタスタとその場から去っていく。

シドは、イヴの手から落ちていた件のブラジャーを拾い上げ、「ほらよ」とアグネに投げ渡すと、荷物を抱え直して銀狼の後を追った。

そして、思わず両手でそれを受け止めたアグネに向かい、イヴが

振り返って思い出したように叫んだ。

「あつ、アグ姐さーん。ハグバルドがまた来ると思っけど、お手柔らかに頼むねー」

「ぎゃっ！ いやよ、あの男の相手なんてっ……！！！」

案の定、アグネは美しい顔を心底嫌そうにしかめ、ばしゃんと大きい音を立てて泉の中に逃げ帰ってしまった。

それを見て、イヴはやれやれと首を横に振る。

いっそ、ハグバルドにえらを付けたら、何もかも上手くいくのではないだろうか、イヴは詮無いことを考えて、大きく一つため息を吐いた。

純潔の乙女

「……」

さて、自宅に辿り着いたイヴとその一行であったが、彼らは玄関の扉の前で逡巡していた。

カポ口婆さんが残してくれた家はなかなか立派で、大きめの玄関扉には呼び鈴が取り付けられている。

それが今、誰も手をかけていないというのに、ひとりで震えてリンリンリンと音を立てているのだ。

いや、震えているのは呼び鈴だけではない。

扉はもちろんのこと壁から屋根にいたるまで、家屋全体がガタガタと小刻みに揺れているのだ。

イヴやフェンリルにも、今朝この家に仲間入りしたばかりのシドにも、その原因が何なのかは予想がついた。

「実に禍々しいな。これは、相当お怒りだぞ」

「まあ、そうだろうね……」

呆れたように呟いたシドを見ずに、イヴもうんざりとした様子で頷いた。

目の前の扉を開けば、たちまちに視界に飛び込んでくるだろう光景を、イヴは簡単に想像することができた。

おそらくそれは、怒りや嫉妬に塗れたブロンド髪の男の、世にも恐ろしい形相に違いないだろう。

出掛ける前、口やかましく絡んできた幽体ウォルスに、イヴは即席の護符を貼って遠ざけた。

修行を積んだ高僧が書いたものほど強力な効き目はなく、そろそろ彼も元通りに復活を果たしている頃だろう。

盛大にまき散らされている彼の怒りが、家全体を震わせているのだ。

ウォルスは、家の外に出ることはできない。

なぜなら、イヴが家の外壁の四つ角に護符を貼って、結界の中に彼を閉じ込めているからだ。

信心深いラムールでは、ゴーストは恐れられる。だから、ウォルスの存在は村人には内緒なのだ。

一方、魔物たちは元々受け入れられているので、すべての存在がオープンになっている。

ウォルスにしてみれば、不公平な扱いに思えるだろう。

「うん。もうちょっと、熱りが冷めてから家に入ろう」

「……そうやって、面倒を後回しにする性格は直したほうがいいと思うぞ」

怒りマックスなウォルスと対峙するのを放棄したイヴは、玄関扉を開けずに家の裏に向かった。

シドとフェンリルは、呆れながらもそれに付いて行く。

途中、小さな池の淵を通ったが、先ほどの泉に通じているそこにアグネの気配は感じられなかった。

この後やってくるであろう上客に、人魚が営業スマイルを向けてくれる可能性は、皆無だろうか。

いまだビリビリと震える外壁を回ると、ちょうど玄関からは真裏のあたりに小屋が一軒建っていた。

どうやら、厩舎のようだ。

「馬を飼っているのか？」

荷物を抱えたままイヴの後ろを歩いてきたシドの目に、ラメが混ざったようにキラキラした白い毛並みと、金色のたてがみの美しい馬の姿が飛び込んできた。

しかしよくよく中を見てみれば、それはただの馬ではなかった。

「ほう。一角獣か」

額の真ん中から一本長い角が生えたそれは、一角獣　ユニコーン。

神話の中でも語られる高貴な獣だが、彼らも魔物の一種だ。

「よく、こいつを飼えたものだな……ああ、イヴは処女だったか」

「そうだよ、悪い？」

ユニコーンは、非常に獰猛で高慢な魔物で、飼いならしがきかないと有名なのだ。

ただ、未通の乙女にだけは懐き、その懐に抱かれれば大人しくなると言われている。

処女と言つてニヤリとしたシドからツンと顔を背けると、イヴは厩舎の中の魔物を手を伸ばして撫でた。

「オルヴァさん、ただいま。エヌーおじさんに、ニンジンいっぱい貰ってきたよ」

「うむ、ご苦労。エヌーには、改めて礼をせねばならんな」

イヴが“オルヴァ”と呼んだ一角獣は、キリリとした目元が理知的で、さらさらのたてがみが長く前髪のように額を覆い、実に男前思い掛けず人語を紡いだ声は低く重厚で、落ち着いた大人の男の雰囲気醸し出し、“凶暴”の二つ名とはほど遠く感じられる。

しかし、好物であるニンジンがいっぱいに詰まった袋を持っていたのが、見知らぬ人型の魔物であると知ったとたん、赤い瞳は剣呑に眦められ、長い鼻面に皺を刻んでシドを威嚇した。

「イヴ、その男は何者だ。わしに相談なしに、迂闊に高位の魔物と関わってはならん」

オルヴァは厳めしい顔をして、我が子を叱るようにイヴを嗜めた。それに対し、彼女が幼馴染みの保安官ロキに答えたのと同じように、フェンリルが拾ったんだもんと返すと、ユニコーンもまた銀狼を責めるように睨んだ。

しかしイヴが、「まあまあ、ここはおひとつ」と言つて荷物の中身を差し出すと、オルヴァの視線はそちらに釘付けになった。

よっぽど好きなのだろう　ニンジンが。

彼はわざとらしくこほんど咳払いすると、イヴが手にもったそれをがじりと齧り、もごもごと咀嚼しながらシドを胡散臭そうに睨んだ。

「貴様、属性は何だ？ 魔力が膨大なのは分かるが、正体が掴めん」「さあな。土に埋まっている間に皆忘れてしまったようで、俺にも分からん」

オルヴァは、数百年を生きた一角獣らしく博識だったが、そんな彼でもシドが何者なのかは知らないようだ。

しかし、記憶喪失に不便も不安も感じていないらしいシドは、まったく困った様子もなかった。

「シドは料理が上手いんだ。うちの料理番に就任したから、仲良くしてね」

「なにっ……！？ イヴ！ そなた、この男を家の中に住まわせるつもりかっ！？」

家長であるイヴはすでにシドを認めたようで、化け物屋の仲間であり家族でもあるオルヴァにも、彼を紹介した。

だが年頃の娘と、得体の知れない人型の雄の魔物が一つ屋根の下などと、オルヴァが頷けるはずがない。

彼はくわつと目を？いて、イヴに詰め寄った。

「そうだけど？」

「なっ……ならんならん、ならーんっ！」

「だって、部屋余ってるし。三食作る他にも、掃除と洗濯と買い物させる気だし」

足元の飼葉をガツガツと踏みつけて抗議するオルヴァに対し、危機感の薄いイヴの答えはどこまでもものん気だ。

さりげなく彼女がもらした、新入りをこき使おうと企む本音に、シドは「おいおい、俺は家政婦か？」とため息を吐いた。

「そなたの貞操が奪われでもしたらどうするっ！ 絶対に許さんっ！」

続けて目を血走らせたオルヴェがそう叫ぶと、イヴはきよとんと

瞳を瞬き、首だけ振り返って背後のシドに問うた。

「シド、私の貞操を奪う予定がある？」

「さあ、どうかな？」

それに対して、シドは否定も肯定もしなかったが、オルヴァはやはり「ならーん！」と繰り返した。

「大丈夫だよ、フェンリルがいるし」

「……」

オルヴァを宥めるようにたてがみを撫でながら、そう言って無邪気に信頼をよこすイヴから、何故かその時フェンリルは気まずそうに視線を逸らした。

「……うん？」

それに気づいて疑問を抱いたのは、シドだけだった。

イヴは、なおも納得できずに苦言を繰り返そうとするオルヴァの口に、せつせとニンジンを押し込んで黙らせるのに忙しい。

大好物をたんまりと与えられたユニコーンは、そのうちすっかり骨抜きになってしまった。

イヴはさらに彼を懐柔しようと、その額から突き出る立派な角に手を伸ばして、さわさわと撫でた。

「あっ！ あっあっあっ、あああ、イヴう〜」

「変な声出さないでよ、オルヴァさん」

一角獣の角は敏感で、オルヴァの場合は性感帯にも等しい。

そう簡単に他人に触れさせない部位を、イヴには無防備に撫で回されて身悶えした。

「ちよつと伸び過ぎだね、角。あとで、少しだけ削ってもいい？」

「あっ……！！ っっ、いっっ……ぞ……ぞ……！！」

さらに、ユニコーンの角には強力な解毒作用があり、イヴの薬作りに一役かっている。

放っておけばどんどん伸びていくそれをヤスリで削って、できた粉末はそのまま解毒薬になるし、少量ずつ他の薬に混ぜれば腹下しや高熱にも効く。

水を浄化する力もあるので、濁った泉などにふり入れて使うこともある。

当然、やすやすと人間に角を削らせたりはしないユニコーンだが、純潔の乙女　イヴの膝に抱かれて角の手入れをされるのは、至福の一時。

呼吸を荒げて熱い吐息をもらし、腰は碎けて足は震え。その時のオルヴァには、普段のダンディさは見る影もない。

「ニンジンはおいしい？　オルヴァさん」

「ああ……最高だな……」

「良かったね。全部食べちゃっていいよ」

甘い快樂の予感に、鼻息を荒くしながらニンジンを食べる魔物に、イヴはまた飽きずに次々とそれを与えた。

そんな様子を後ろから眺めていたシドは、この家の料理番として食材を確保しよう動く。

新鮮なニンジンは、料理に入れると彩りがよく、栄養も豊富な根菜だ。

ところがイヴは、伸びてきたシドの手からそれを遠ざけた。

「おい、そいつにニンジンやるのはいいが、料理にも使うからせめて一本残しとけ」

「ぜえーんぶ食べていいのよ、オルヴァさん」

イヴはシドの言葉を無視して、ニンジンをはたすらオルヴァに捧げた。

それに、シドはあることに思い至った。

「イヴ……お前もしかして、ニンジンが嫌いなのか？」

「……」

どうやら、凶星のようだ。

彼女は口を噤んで、シドの視線から顔を逸らせた。

足元で、彼女の保護者のような銀狼が、やれやれという風にため息を吐いた。

「ほづ、なるほど……」

シドはそうと呟くと、鋭い犬歯を覗かせて魔物らしい笑みを浮かべた。

そして、イヴが抱え込んでいた袋の中に強引に手を突っ込み、大きな掌にニンジンを数本押し掴んで引き抜いた。

「???っ、シド! いや……っ」

「好き嫌いはいけない。お嬢様の料理番としては、黙っちゃいられないな」

意地悪く口角を引き上げ、そう宣言したシドを見上げたイヴは、べそをかいたような実に情けない顔をした。

それがどうにも堪らなく可愛く見えて、シドは思わず、彼女のストロベリーブロンドをわしゃわしゃと撫で回していた。

哀れな幽体

家屋は、まだビリビリと身を震わせている。

どうやら禍々しい怒気を放つ幽体ウォルスを落ち着かせるには、イヴ本人が行って宥める他なさそうだ。

イヴは「めんどくさいめんどくさい」とぶちぶち言いながらも、仕方なく扉に手をかけた。

ただし、表の玄関からではなく、オルヴァの厩舎の向いにある裏口から入ることにした。

しかし、家から出られないウォルスにとっては、その内部が全てである。

隅々にまで気配を張り巡らせている彼にはねずに、家に入ることなど不可能なのだ。

「やあ、おかえりイチゴちゃん」

案の定、イヴが扉を潜ったとたん、どこからともなくふわりと現れたのは、身体の透けたブロンドの男。

端正な顔には柔らかな笑みが浮かび、イヴを勝手な渾名で呼ぶ声は蕩けるように甘い。こめかみに青筋を立てている。

そのあまりの怒気に、うっと仰け反って回れ右をして屋外に逃亡しようとしたイヴだったが、がばりと抱き締めるようにして彼に捕われてしまった。

「おかえりって、言ってるんだけど？」

「……ただいま、ウォルス」

幽体ウォルスからはイヴに触れることができるが、イヴが彼に触れようとすると、するりと幻のように通り抜けてしまう。

つまり、ウォルスの腕から逃れようにも、突っ張りさえきかないので彼を押退けることはできず、こうやって捕まってしまうえばイヴには成す術がない。

ウォルスの気が済んで解放されるのを、大人しく待つしかないのだ。??おそるべし、幽体。

「僕に黙ってでかけるなんて、いけない子だね」

「……買い物に行っただけじゃない」

「そうだね　他の男と、ね」

ちゅっ……と音を立てて、ウォルスは両腕に囲ったイヴのこめかみにキスをしながら、少し離れた位置に佇む黒髪の魔物を呪い殺せそうな目で睨みつけた。

それから、お気に入りの赤味があったブロンドに指を通し、それがかすかに湿っているのに気づいたようだ。

「泉に寄ってきたね？　僕の大事なストロベリーブロンドを、人魚が濡れた手で触ったようだ」

「……頼まれものを、渡してきただけだよ」

「裏口から入ってきたってことは、あの凶暴な角持ちにも会ったんだね。服に飼葉がくっついてるよ」

「……オルヴァさんには、ニンジンあげただけだよ」

ウォルスの瞳は、深い青。

魔物の赤とは似ても似つかぬそれが、今は火炎でも噴き出しそうなほど滾りに滾っている。

イヴは、今までも何度か護符を貼付けて彼を抑えたことはあったが、その後のウォルスがこれほど怒り狂ったことはなかった。

せいぜい、拗ねてまとわりついて鬱陶しいくらいだったのに。

一方、シドの方も、いささか機嫌が悪そうだ。

胸の前で腕を組んで扉に凭れ、剣呑な赤い目でウォルスを見据えている。

(ゴーストと人型の魔物は、相性が良くないのかな……?)

そう思って首を傾げたイヴの顎を、白くて透けた掌が掴み、ぐい

つと自分の方に向けさせた。

ウォルスに触れている部分は、実際にものに触れているような感触はなく、ただただひやりと冷たい。

「どうせまた、魔物どもに唇を許したんでしょっ!」

「私のキスは、皆にはおやつみたいもんで……」

「だからって、ほいほい安売りしていいものじゃない! 僕だつて、君のキスがほしいのにつ……!」

「……いっつも、勝手にするじゃない」

「僕からじゃなくて、イヴからしてほしいのっ! この違いには大きな意味があるのっ!」

ウォルスはそう叫ぶと、噛み付くようにイヴの唇を塞いだ。

彼は性急に舌を押し込み、イヴの唇を抉じ開けたが、彼女にしてみれば口内がただただひやりとするばかりで、舌に絡まる感触はなにもない。

視覚的には確かに深く口付けているのに、何も 吐息さえも分け合えないそれは、ただ虚しい。

「イヴ……イヴ……っ」

ウォルスは叶わぬ思いに絶えるように、イヴの名を何度も呼んだ。

「……」

イヴの方も、いつになく衝動的になったウォルスに戸惑い、それをどう受け止めていいのか分からなくて困り果てた。

そんな様子を見かねたのか、いつの間にか傍らにやってきていた銀狼が、静かに寄り添い宿めるようにイヴの手を舐めた。

そして、同じように扉の方から近づいてきた魔物が、おもむろに口を開いた。

哀れな幽体に向かって。

「この娘を、お前の怨念の中に引きずり込むな」

シドはそう告げると、イヴの二の腕を掴んで自分の方に引き寄せ

た。

もちろんウォルスは奪われまいと、さらに深く彼女を抱き締めようとするが、器を持たぬ魂が生者の強さに敵うはずがない。そうではなくばならない。

シドの逞しい腕の中に匿われたイヴはほっとため息を吐きながらも、悔しそうに彼を睨みつけるウォルスを気遣わしげに見やった。

彼の苛立ちや妬みの衝動に反応して、家中の窓や家具が震えてガタガタと大きく音を立て、窓辺に置いていた花瓶が床に落ちて割れた。

渦巻く負の感情は家の中に充満し、イヴはきいんと耳鳴りを覚えて眉を顰めた。

だが、そんなポルターガイスト現象にも顔色一つ変えないシドは、その元凶たる男の魂に向かい合った。

「それほど報われぬ我が身を憂うなら、よい方法があるだろう」
そう言う彼を、ウォルスは訝しげな瞳で睨みつけた。

「置物でも人形でも、生きているものを象ったものに憑依すればいい。それが器となって、生者からもお前に触れられるようになるだろう」

確かに、それは一理ある。

たとえ偽りの身体であっても、魂を入れてしまえばそれは一時その者の器の代わりになる。

うまくシンクロできれば、器が受ける感触はそのまま魂の感触となるだろう。

もちろんその場合、器が受けた痛みも伝わってしまうのだが。

ウォルスはシドの提案にしばしの間思案していたと思ったら、突然あたりをきよきよと見回し始めた。

けれど、一瞬じつとシドとフェンリルを見つめた彼に、シドはすかさず釘を刺す。

「おい。生きている者へ憑依するのは、なしだぞ」

「分かっている。誰が魔物の身体になど入るものか」

そうして、ウォルスの瞳を捉えたのは、ソファにちょこんと置かれていたぬいぐるみ。

見た目はいささか不格好だが、それはウォルスにとってものすごく印象の強いぬいぐるみだった。

何故なら、イヴがソファへ座る度、それは必ず彼女の膝の上に抱かれるからだ。

その時のウォルスに、迷いはなかった。

彼の意識はソファの上のぬいぐるみに集中し、虚空を見つめる作り物の双眼に想いを注いだ。

そうして、イヴと二匹の魔物が見守る前で、男の透けた身体はみるみる形を失い、白く濃い煙のような姿になったかと思うと、すーっと尾を引いて空中を移動し、件のぬいぐるみの中に吸い込まれていった。

「えっ……!？」

次の瞬間　ソファにくたつと置かれていただけのぬいぐるみが、二本の足ですくと立ち上がったのだ。

それは、丸い頭をぎこちなく動かして己の身体を見下ろし、我が身を確かめるように両の手を上げたり下げたりしてた。

そして大きなボタンでできた瞳が、命を宿したかのようにぱあっと輝いて、イヴを見た。

「イチゴちゃああんーっ!!」

「うわあっ!？」

ベシッ!

とたん、叫んで飛びついてきたぬいぐるみを、イヴは思わず叩き落とした。

それはべしやりと床にうつぶせに貼り付いたが、しまったと思つて慌ててしゃがみ込んだイヴの前で、すぐにぴよこんつと飛び起き

た。

「痛いっ、ひどいつ、イチゴちゃんっ！」

「あゝ……ごめん。……ウオ、ウォルスなのかな？」

「そうだよ、他に誰がいるっていうの？ あゝ痛い！ でも痛みを感じたの久しぶりっ！ 生きてるって素晴らしい！」

「……いや、アンタ生きてないよ？」

二本足で立ち上がったウォルシンぬいぐるみは、しかめっ面をして抗議したかと思ったら、今度は喜びいっぱい顔をしてみせた。布に綿を詰めただけの簡素なぬいぐるみのはずなのに、一体どうやって表情を作っているんだろうと思いつつ、イヴが眺めていると、その隣に同じようにしてシドがしゃがんだ。

そして、得たばかりの仮そめの身体に感動しているウォルスの背中を、魔力を込めた掌でぽんつと叩いた。

「???っ!？」

ほんの軽く叩いただけに見えたのに、ウォルスはびっくりと飛び上がった、痙攣したようにふるふると身を震わせた。

その後、一瞬身体を硬直させたかに見えたが、すぐに何ごともないかのように動きだし、シドに向かって怒鳴った。

「貴様っ……何をしたっ!？」

子犬ほどのサイズのぬいぐるみだが、声はウォルス自身の涼やかな美声だ。

そのギャップが面白かったのか、イヴはしゃがんだ膝に頬杖をついてにやにやした。

対してシドは、食って掛かってくるぬいぐるみは無感動に見下ろし、何でもないことのように告げた。

「その器の中に、お前の魂を封じ込めた」

「???なっ……!？」

つまり、仮に入ったぬいぐるみの身体から、ウォルスが魂だけで抜け出すことができないように、シドは魔力で彼を閉じ込めたのだ。そうなれば、ウォルスはただの動くぬいぐるみ。

魂を器に収めたということは、その器の許容を超える力を使うことはできなくなるということ、彼は壁や扉を通り抜けることも、家を震わせるようなポルターガイスト現象を起こすこともできなくなった。

「すでに忠告しただろう？ 悪霊になりかけている、と。禍々しさが溢れ過ぎると、そのうち自分でも制御できなくなる」

シドは立ち上がりそう言い残すと、荷物を持ってさっさと台所の方に入っていつてしまった。

それを見送ると、イヴは呆然と佇むぬいぐるみの姿をしたウォールスに向き直り、その頬をぶにぶにと突ついた。

彼は幽体としての特殊能力を失った代わりに、イヴが触れる感触と温もりを感じられるようになった。

それに、ぬいぐるみの中身がゴーストなどと黙っていれば、信心深いラムールの人々もウォールスを怖がりはしまい。

彼は小さな魔物のように見え、イヴにくっついて家の外にも出ることも可能になるだろう。

「これ、私が生まれて初めて縫った、カポ口婆ちゃんへのプレゼントだったんだよ？」

「え……イチゴちゃんの手作り？」

イヴは、ウォールス相手には珍しいほどの無邪気な笑みを浮かべた。ウォールスは、自分の器になった布でできた身体を見下ろす。

そして、二人は声を揃えて言った。

「そう、かわいいネコちゃん」

「うん、とつてもかわいいブタさん」

……残念ながら、イヴは裁縫もいまいち得意とは言えなかった。

幼かったイヴが育ての親のために作ったのは、魔女の使い魔に相応しい黒猫のぬいぐるみ。

黒いビロードを縫い合わせたそれは、確かにいささかボテツとし

ていて不格好。縫い目も粗くて大胆だ。

黒猫というより黒豚と称する方がしっくりきそうな態だったが、カポロはそれをととても大切にし、死の間際まで離さず側に置いていた。

彼女が亡くなった今、ぬいぐるみはイヴにとってカポロの形見のような存在になった。

それに憑依したことで、自分に向けられるイヴの視線がいくらか柔らかくなったと、その後ウォルスはこっそり小さくほくそ笑んだ。

キスと報酬

イヴが奥の部屋へ行くと、シドはすでにキッチンに立って料理を始めていた。

先ほど遅めの朝食を食べたばかりだと思ったが、外出してそれなりに小腹も空いている。

特にやることがないイヴは、手を洗ってきてダイニングの椅子に腰掛けた。

(そういえば、エプロン買ってあげるの、忘れた……)

そう思いながら、てきぱきと仕事をこなす魔物の後ろ姿を眺める。白いシャツに黒いパンツ。

緩く癖のついた艶やかな黒髪は、無造作に背中に流されている。スレンダーに見えるが実は筋肉質で、イヴが今まで出会った誰よりも長身。

魔物なので外見からは年齢は計れないが、見た目はイヴより十ほど上だろう。

他人の容姿にも自分の容姿にも頓着しない彼女でも、シドのそれがとんでもなく整っているのは分かる。

魔物は、その身に抱いた魔力が強ければ強いほど、容姿の美しさも増すのだと言う。

ならば、やはりシドは相当高位の魔物であるに違いない。

一般的に、人間の姿に近い方が魔物としてのランクは上である。

シドや、上半身が人間の女性と見紛う人魚アグネなどは、やはりそれに当て嵌まる。

しかし、馬の姿に似た一角獣オルヴァも、神格化されるほどの貴い種族。

(でも……一番綺麗なのは、フェンリルだ)

何よりも、銀狼フェンリルのしなやかな美しさは群を抜いているとイヴは思う。

育ての親であったカポ口亡き今、イヴにとっては一番の家族であるフェンリルもまた、高位の魔物に違いなかるう。

イヴは、側に待てるようにおすわりをしていた銀狼にぺたりとくっ付き、その喉元の毛をがしがしと撫でた。

すると、フェンリルは気持ち良さそうに、ルビーのような赤い目を細めた。

そんな彼に微笑んだイヴだったが、その時前方のシドの片手に、自分が最も苦手とする橙色の物体を見つけて、弾かれたように立ち上がった。

「シドっ！ ニンジン入れないで入れないで入れないで 入れるなったらっ！」

「うるさいぞ、イヴ。子供じゃあるまいし、ニンジンごときで騒ぐな」

慌てて駆け寄って、ニンジンを奪い取るうとしたイヴだったが、料理番には難なく阻まれてしまう。

そうこうしている内にも、それは慣れた手付きで皮を剥かれた。「俺が納得出来るような、ニンジンを食べたくない理由を言えるなら、考えてやってもいい」

「味が嫌、臭いが嫌、食感が嫌」

「味も臭いも食感も気にならないように料理してやる……って、俺はお前のママか」

「こんなゴツいママはいやだっ！」

「俺だって、お前の保護者になるつもりはない」

口では女々しく縋るイヴの相手をしながらも、シドの手は器用に包丁を扱いニンジンを細かくみじん切りにしていく。

次いで、買ってきた荷物の中から取り出した、大きなタマネギの皮を指の爪を引っかけて剥き、ピーマンは種だけくりとり抜いた。

実に手慣れた様子である。

さらに、朝食の残りのベーコンも含めて食材を細かく刻み、フライパンを火にかけようとすると、背中に貼り付いていたイヴが、往生際悪くシドのシャツを両手で引っ張った。

「居候のくせに、家長の命令がきけないのっ!？」

「あいにくだが、俺の上司はお前ではなく銀狼だろっ。フェンリル様は、イヴにニンジンを食べせるとおっしゃっている」

「フェニー、そんなこと言わないよねえ？」

「……」

ダイニングテーブルの脇に臥せていたフェンリルは、甘えた声で自分を呼ぶイヴから視線を逸らした。

この時ばかりは、銀狼様もイヴの味方をしてはくれないらしい。

「なるほど、食わねば口移ししてでも食わせるとおっしゃっている」「おっしゃってないー!」

フェンリルの無言の後押しを受けたシドは、傍らでちょこまかしていたイヴを捕まえると、彼女の顎を掴んだ。
掌にすっぽり収まる顎は小さい。

指先に触れるふわふわと柔らかい頬の感触も、何だかとても愛おしい。

彼がぐいっと顔を近づけても、照れて赤くなりもしなければ、期待に胸を高鳴らせることもないイヴは、性的に非常に幼いのだろう。よくよく話を聞いてみれば、彼女が育ったこのラムール村は過疎化が進み、若者は成人を済ませれば次々と大きな町に出て行ってしまふという。

イヴと同じ年頃で村に残っているのは、村長の孫で保安官のロキただ一人だった。

あとは、彼らの親世代と大半は年寄り達でしめられている。

村特産の穀物ムールの収穫期になれば、町に住まふ若い世帯も手伝いに帰ってくるので賑やかになるが、それは一時のこと。

出会いの極端に少ないこの村で、イヴの恋愛経験値が地を這って

いるのは、ある意味仕方のないことと言えよう。

しかし、もしも口キにもう少し甲斐性があれば、イヴは彼といい仲間になっていたかもしれぬ。

そうならなかったことに、何故かほつとする己を可笑しく思いながら、シドはやりわりと彼女の唇を食んだ。

「……っ、シド、つまみ食いし過ぎだよ。また胃が苦しくなっても知らないよ?」

イヴにとつてのキスとは、魔物に報酬を与える手段に過ぎない。

それを分かつていたつもりシドだが、色気の欠片も見せない少女に、思わずため息が漏れた。

「……いいか、イヴ。キスと、魔物への報酬はまったくの別物だぞ」「やること、一緒じゃない」

「いいや違う。誰も、お前にそれを教えなかったんだな? ??なら、俺が教えてやる」

そう言うと、シドは顎を掴んでいた手を頬に滑らせ、柔らかなそれを優しく包み込んだ。

そうして、すぐに唇を開いて舌を差し出そうとするイヴに、「まだ唇は開かなくていい」と告げると、甘く啄むようなキスを与える。イヴからは、戸惑うような気配がひしひしと伝わってくる。

彼女が今まで経験したキスは、深く求められるものばかりだった。舌を吸われ、唾液を奪われるものばかりだったのだ。

イヴの体液に執着がないウォルスでさえ、いつも貪欲に唇の奥を求めた。

それなのに、シドのそれは表面を撫でるように優しく、柔らかい。彼の舌はイヴを抉じ開けず、ただただ唇の形をなぞるように掠めるだけ。

その意図も意味も分からず、両目を開いてじつと相手を観察していた少女を、シドは呆れたように「空気を読め」と言って嗜めた。

「まず、両目を閉じる」

「なんで?」

「それが、キスをする時の礼儀だ」

シドはぱちくりする瞳に向かってそう言つと、手本を見せるように両の瞼を閉じた。

切れ長の鋭い瞳が、驚くほど長く黒い睫毛の下に隠された。

(そもそも、ニンジンを食べさせるっていうのは、どこへいつちやつたんだろう……?)

イヴはそう思いながらも、至近距離で人外の美貌を見つめ続けるのは何となく気まずく、おずおずと自分も瞼を閉じてみた。

優しく押し付けられるシドの唇は、思いがけず柔らかく温かい。

確かに、いつもの魔物達とのそれとは何かが違う??そう、イヴに思わせた。

それが一体何なのかと気づくには、彼女の情緒はまだあまりにも未熟だった。

それでも嫌悪を示さぬイヴの様子がシドの気を良くさせ、彼は何度も角度を変えて無垢な唇を味わったが、それ以上キスを深めようとはしなかった。

しかしながら、唾液を交わさぬ長い長いキスを終えたイヴの表情には、ぐつとくるものがあつたようだ。

魔物にべろべる舌を吸われまくつてもけろりとしていた少女が、唇が触れ合うだけのキスで、わずかながらも頬をピンク色に染めていたのだ。

元来理性とは縁の薄い魔物らしく、その時一拳に沸き上がった衝動に抗わず、無垢な少女に襲いかかろうとしたシドだったが、そこはちゃんと抑止力が働いた。

もちろん、外側から。

「……噛むなフェンリル、穴が開く」

イヴを強くかき抱こうとしたシドの腕には、いつの間にか側に来ていたフェンリルの牙が突き刺さっていた。

「ウォルスも、足を踏むな。痛くはないが気が散る」

イヴの両脚の間に割り込ませようと企んだ片足は、ぬいぐるみの

身体を得たウォルスによって床に留められた。

結局、銀狼とぬいぐるみのタッグにより、イヴは発情しかけた料理番から引き離された。

シドの方も無理強いするつもりはないらしく、ひとつため息を残すどくるとフライパンに向き直り、何ごともなかったかのように料理を再開した。

ただイヴの胸にはひとつ、小さく不思議な熱が残ったが、それが何であるかはやはり分からなかった。

けれど、嫌なものではない。

(何だかわからないけど……今度はフェンリルやアグ姐さんとする時も、目を閉じてみよう)

そんな、少し間違えた方向にイヴの思考が向いてしまったとも知らず、シドは手早く昼食を完成させていた。

具だくさん、ふわふわのオムレツ。

「……うんまい」

「当然だな」

大嫌いなニンジンの入ったそれを恐る恐る口に含んだイヴが、次の瞬間頬を染めて正直な感想を漏らすと、シドは誇らしげな笑みを浮かべた。

そして、彼らの穏やかな昼食が済んだと同時に、玄関の呼び鈴がリンと鳴らされた。

どら息子

トサリ

その音を立てて、客間のテーブルの上に置かれたのは、大きく膨らんだ麻の袋だった。

それを持ってきた本人が、頼まれもしないのに袋を縛っていた紐を解いて、中身を曝け出す。

そこに詰まっていたものがじゃらじゃらと硬質な音を響かせて傾れ、イヴは思わずごくりと唾を飲んだ。

「これだけ用意すれば文句はないだろう。今日こそ、いい返事をきかせてもらおう」

そう言つて、ソファに偉そうにふんぞり返つたのは、まだ若い男だった。

赤銅色の髪の毛の、それなりに整った容姿をしているが、如何せん目付きと態度が非常に悪い。

まるで召使いを呼びつけるように乱暴に呼び鈴を鳴らし、扉を開いて応対したイヴの許しを得ぬままにずかずかと家上がり込み、勝手に客間に居座つた図々しい客　彼こそ、領主シュザック候のドラ息子、ハグバルドだ。

もうすでに何度もラムール村にもイヴの家にも通い慣れた彼は、遠慮という言葉を知らない。

その傍若無人な振る舞いは目に余るものがあり、彼を甘やかして育ててしまったシュザック候もひどく頭を痛めているらしい。

ハグバルドの年の離れた兄は温厚で誠実な人柄で、父親に負けな良い領主になるだろうと、領民に慕われている。

同じく年の離れた姉達も聡明で、それぞれ王都の名のある貴族の元に嫁ぎ、シュザックの名を国王陛下にまで知らしめた。

優秀な兄と姉達と比べられることが、甘やかされて育つたハグバ

ルドをますます卑屈にさせ、荒れさせた。

そんな彼を、プライドの高い高位の魔物であるアグネが嫌うのも、当然のことだろう。

ハグバルドはもちろん、イヴの家に来る途中泉でアグネを呼んだが、彼女が姿を現すことはなかった。

何者も金の力で従えてきたハグバルドは、人間の女のように自分に媚を売らないアグネに戸惑い、いうことを聞かない彼女に苛立っていた。

そしてその苛立ちの矛先は、いつも人魚との仲介を果たす化け物屋の主人 イヴに向けられる。

アグネが、彼よりも年下の田舎の村娘には従い、彼には見せない優しい笑みを見せることを、ハグバルドは知っているからだ。

父シユザツク候が、やたらと彼女を気にかけることも気に入らない。

そして、金儲けのために魔物達を侍らせているくせに、金を積んでも困ったような顔をするイヴが、ハグバルドはますます気に入らなかった。

「ごめんなさい、ハグバルドさん。アグネはペットでも物でもないので、お売りすることはできません」

「この金額ではまだ足りないと言う気か。どこまでも貪欲で卑しい女だな」

「ですから……金額の問題ではないんですって……」

金払いの良さにだけは定評のあるハグバルドは、ラムール村で店を営む者にとってはまたとない上客である。

そう思って、引きつりそうになる顔を無理矢理笑顔にするイヴに、領主の放蕩息子は憎々しげに吐き捨てた。

そんなハグバルドの態度に、理性的なフェンリルは眉をしかめながらも、イヴに直接の害を与えない限りは黙殺するつもりか、彼女の隣でふせの姿勢をして大人しくしている。

一方、ぬいぐるみに憑依して始めて人前に入るウォルスは、怒りを隠し切れない様子。

ハグバルドのあんまりな態度の頭に血を上らせ、飛び蹴りでもくらわせてやろうと跳ねたが、それを察したイヴが膝に抱いて止めた。喚こうとした口も、彼女が両手で塞いでしまい、ふがふがと言葉にならない息が漏れるだけ。

今のウォルスは、子犬サイズの小さな魔物にしか見えない。

ハグバルドはそんな彼をじろりと見たが、その正体については特に興味がないらしく、すぐに視線を逸らした。

「とにかく、アグネと二人きりで話がしたい」

「はあ、お気持ちは分かりますけど……突然お越しになっては、彼女の方にも都合というものが……」

「泉にいるのは分かっているんだ。アグネほど法外な対価を要求する魔物、半端な金持ちではそう易々と使えまい。先月隣の領主が王都からの客をもてなす席に呼んで以降、彼女の指名はないはずだ」

「……はあ、よくご存知で」

別にスパイに見張らせているわけではなかるうが、ハルバルドはアグネの動向についてほぼ把握しているようだ。

遠くの町で仕事をさせているなどと、嘘を吐いて誤摩化そうとも無駄だと、イヴは先手を打たれた。

彼のアグネへの執着は、相変わらず激しい。

しかし対するアグネの方も、嫌と言ったら嫌なのだ。

いくらイヴが頼みこんでも、ハグバルドを毛嫌いしている彼女は、二人きりで会うなんて承知しないだろう。

イヴは、困ったなあどうしたもんか……と、心の中で盛大にため息を吐いた。

そんな彼女の上に、すつと影が差した。

何かと思って顔を上げると、お茶の用意を乗せた盆を持ったシドが傍らに立っていて、洗練された手付きでテーブルの上にそれを整

えた。

ハグバルドが家に入り込んできた時、シドは昼食の片付けに台所にこもっていたので、二人が顔を合わせるのはこれが初めてだ。

ハグバルドはシドの人外な美貌に本能的な畏怖を感じ、一瞬うつと仰け反って怯んだようだった。しかしすぐに気を取り直すと、今度はふんと鼻を鳴らして鬨め、蔑むように彼とイヴを見比べた。

「田舎娘のくせに、上等な男を侍らせていい気なもんだな。アグネを働かせて分捕った大金に、ものを言わせているのだろう」

明らかかなイヴに対する侮蔑に、さすがにフェンリルもふせつていた身体を起こして、ハグバルドを睨みつけた。

イヴの膝に抱かれて一時満足げにしていたウォルスも、再びいきり立つ。

シドは怒りこそしないものの、おかしいことを言う奴だとも言ういたげに、ハグバルドに呆れたような眼差しを向けた。

ただ、言われた本人であるイヴはというと、彼の言動にいちいち反応を返すのは馬鹿らしいとばかりに、へらりと作り笑いを浮かべて躲した。

さらに、『化け物屋』の主人としては、今朝仲間入りを果たしたばかりの新人の宣伝に、ぬかりはない。

「いいえ、ハグバルドさん。彼もれっきとした化け物屋の一員ですよ。こう見えても、料理が得意なのです」

「……この男も、魔物なのか？」

「はい、この赤い目が何より証拠にございます。ご入用の際は、いつでもお気軽にご相談下さいませ」

そんなイヴのにつこり営業スマイルを眺めたハルバルドは、「汚らしい。男娼などに用はないわ」と眉を顰めて吐き捨てた。

けれど、初みな田舎娘は笑顔の下で（ダンシヨールってなんだろう）と疑問符を浮かべ、謂れのない侮蔑を向けられたシド自身は気にもとめなかった。

結局その後、アグネに会わせるの一点張りのハグバルドに困ったイヴは、何度か表の池や泉に足を運んでアグネを呼んだが、彼女は姿現さなかった。

二日酔いがまだ完全に癒えていなくて、気分が良くないのかもしれない。

人魚は、気まぐれで我が侷な魔物だ。

それは彼女達の特性であり扱いにくいのが、それに堪えてでも側に置きたいと思わせるほど美しく、非常に魅力的だ。

水底のどこかで不貞腐れて、それでもアグネはイヴの声を聞いたのだらう。

「アグ姐さん。ブラのサイズは問題なかったー？」

イヴがそう話題を変えると、しばらくしてバブルリングがひとつぶかーと浮かんできた。

質問に対するアグネの答えなのだらう。Eカップブラジャーは、彼女の豊満な胸にしっくりきたようだ。

イヴは、無理に彼女をハグバルドの前に引つ張り出す気のない。本人の意に添わぬ仕事はさせないのが、化け物屋のモットーである。

もちろん、そんなルールに納得しないハグバルドは、「つべこべ言わずにアグネを連れて来い」ととにかくしつこかった。

日が傾き始めた頃、ようやくハグバルドはイヴの家を後にした。

一応の勤務時間を終えて宣言通りやってきたロキが、領主の子息を祖父である村長の家まで連れて帰ってくれたのだ。

彼は昼間に見たシドの存在をイヴに問いつめるつもりだったが、今日のところは迷惑な客に困っている彼女を助けることを優先してくれたらしい。

正式にユングリング国家治安庁に属し、領主シュザック候から腕章を与えられたロキは、正義感に溢れ何ものにも屈しない頼もしい

保安官だ。

アグネに会えないままだと渋ったハグバルドも、何か心に疾しいことでもあるのか、敵めしい保安官の制服のままやってきたロキには、それほど頑な抵抗は見せなかった。

「また明日来る。アグネに、話を通しておけ」

彼はそう言い残し、金貨の詰まった麻の袋を掴んで引き上げていった。

ようやく出て行ってくれた招かれざる客を見送り、イヴは疲れたように大きいため息を吐いた。

忍耐を試されるようなハグバルドとの時間に始終付き合ったフェンリルは、やれやれとようやく床から腰を上げ、本物の魔女の使い魔のようにイヴの肩に掴まっていた黒猫ウォルスは、ビロードの皮膚を器用に顰めて憎々しげに言った。

「あいつ、明日も来るって。うんざりだな、まったく」

「うんざりだねえ」

「もういつそ、あの人魚をあいつに売ってしまいなよ、イチゴちゃん。あの様子なら、言い値で売れるよ？」

「駄目だよ、ウォルス。化け物屋はあくまでも魔物との仲介役。アグ姐さん本人が望むならまだしも、人身売買みたいな取引はしないよ」

ウォルスはなおも不満げだったが、それはイヴも譲れないところだ。

化け物屋は魔物を金で取引したりしない。ただもしも、依頼主と魔物本人双方が望むなら、彼らが共にいることに反対もしない。

老い先短い寂しい老人に請われて、側にいたいと願ったピクシーを譲ったりと、今までもそういうケースがなかったわけではないのだ。

しかしアグネの場合は彼女本人が嫌がるだろうし、何よりイヴ自身、人間的に未熟すぎるハグバルドに、大切な友人を預けるなど死んでもごめんだった。

彼が心を入れ替えて、アグネも見直すような人間になってくれな
いものかと、望みの薄い自らの考えに無理無理と首を振る。

とにかく一刻も早く諦めて、ハグバルドが村から出て行ってくれ
ることを祈った。

イヴ達が玄関の鍵を閉めてダイニングにやってくると、テーブル
の上にはすでに夕食の用意がなされていた。

もちろん料理をこしらえたのは、接客するイヴ達を残して奥に引
っ込んでいたシドだ。

手を洗って席に着いたイヴにフォークを差し出す魔物を見上げ、
(やっぱりエプロンを買ってあげよう)と思いながら、彼女はふと
思い出したことを口にした。

「ところで、結局ダンシヨーって何なの？ シドは、本当にそれな
の？」

無邪気な様子で飛び出した質問に対し、シドは両腕を組んでニヤ
リと口端を引き上げた。

「イヴが望むなら、お前専属のそれになってやってもいいぞ」

とたん、ウォルスからは華麗なとび蹴りが繰り出されたが、シド
難なくそれを躲した。

「……………」

けれど噛み付いてくるかと思ったフェンリルは、何故かまた視線
を逸らした。

シドは横目でそんな彼を眺めて、ふむ……と顎を撫でた。

その夜。

イヴが眠った気配を確かめて、シドは家の外に出た。

ウォルスは、ぬいぐるみ代わりにイヴのベッドに侍ることを許さ
れ、有頂天で彼女について行ったので、彼に声を掛けるものはいな
い。

十六夜の今夜は、まだ月は大きく丸い。

闇を抑えて辺りを照らす月明かりの中、玄関を潜ったシドの視線の先に一つ、佇む人影があった。

シドは月の光にわずかに目を細めると、その人影に向かって声を掛けた。

「お前の真意を聞こうではないか 銀狼」

新月の闇

白銀の長い髪に、魔物の証であるルビーのように真っ赤な瞳。

白磁の肌には温かみは感じられないが、長い睫毛を瞬かせたそれは、確かに生きてそこに立っているのだろう。

すつと通った鼻筋は形良く、薄い唇は上品だ。

恐ろしく精巧なシンメトリーに整った容姿には、畏怖さえ覚える。しかしながら、その背は低く身体は華奢で、見た目の歳は十にも満たないような幼さ。

少年のように見えるが、その容貌は中性的で、はっきりと断言はできない。

シドに“銀狼”と呼ばれた美しい子供は、ひどく冷たい瞳で彼を見返した。

「これは驚いた。お前ほどの魔力を持つ者が、人型になれぬはずはないと思っていたが、まさかこんな可愛らしい子供の……」

「だまれ」

じろじろと遠慮のない視線で彼を眺め、面白そうに犬歯を剥き出しに笑んだシドの言葉を、銀髪の子供　フェンリルは鋭く遮った。そう　それは、イヴの一番の魔物である美しい銀狼の、人型に変化した姿だったのだ。

見た目のとおりあどけなく、しかし温度を感じさせない声は、戯れ言を許さない厳しいものだった。

シドはそれに軽く肩を竦めると、長い脚を踏み出して相手との距離を縮めた。

「では、真面目な話をしよう」

「……」

「俺を森の中で見つけたのは、お前だな。イヴに掘り出させたのは、何故だ？」

シドは、ずっと疑問に思っていたことを尋ねた。

今日一日一緒にいたことで、フェンリルという魔物がどれだけイヴを大切にしているか、シドにはよく分かった。

そんな彼が何故、自分のような得体の知れない魔物を、わざわざ彼女の側に置こうとしているのか。

シドが彼女に害をなさないとも限らないのに、何故近くにいて触れることを許しているのか。

しかも、どうにもフェンリル自身、必死に我慢してそれを許している態がある。

イヴにかまおうとするシドを見ないように顔を逸らし、時々は耐えられなくなつたかのようにかぶりついてくるのだ。

彼には、イヴとシドを親密にさせなければいけない理由が、何かあるように見受けられた。

しかも、本人としては非常に不本意ながら。

「お前は、俺に何をさせたい。それは、イヴのためなのか？」

「……そうだ。イヴのためだ」

悔しげにシドを睨み付けたフェンリルは、小さな声でそう答えた。

魔物の魔力は、月の満ち欠けの影響を受ける。

なぜなら、月の光こそが魔力の源であるからだ。

一般的に、満月の夜には彼らの力は最高潮に達し、すべての柵から解放されて最も自由になると言われている。

現に、満月だった昨夜は、人魚のアグネは人の足を得て陸に上がり、夜遊びを楽しんだ。

力の満ちたフェンリルは森の中でシドという存在を見つけ、月光の影響がまだ強く残るこの夜もまた、人の姿を象り人語を操っている。

一角獣オルヴァは人型にこそならないものの、その背には真っ白い翼を生やして空に駆け上がるという。

また、力が増すのは矮小な魔物でも同じことだ。

小さな彼らは漲る力に浮き足立ち、歌って踊って、大宴会。

少しばかり騒がしいのも、魔物と共存するユングリングの人々は、この夜ばかりは大目にみてくれる。

ところが逆に、月がその姿を隠してしまう新月　朔の夜は、魔物たちは静かになる。

力を失ってしまうわけではないが、それを温存し大人しくあろうという本能が働くのだという。

「これよりおおよそ半月後、月が消え、夜が完全な闇に支配される時　一年のうちで十一番目の新月の夜、ユングリングの空を強大な闇が通る」

「　強大な闇？　なんだ、それは」

それは十数年前のある年、突然ユングリングに現れた。

朔夜の闇をさらなる暗黒で覆い隠す、“闇”。

それ自体が、何か悪さをするわけではない。現に、魔力を感知しない普通の人間は、その到来に気づくことさえない。

ただ一夜ユングリングの空を支配し、朝には通り過ぎる??それだけの存在。

何かを探しているようだという者もいるが、それが空から降りて来ることも、地上に手を伸ばすことすらない。

しかし、魔物にとって“闇”は大きな脅威であった。

「“闇の王”とも“黄泉の使い”とも言われているが、その正体は定かではない。だが、力が充分発揮できない朔夜の魔物は、それを恐れ怯える　そしてカポロもまた、それにイヴが連れて行かれると恐れた」

「　イヴが？」

「月が隠れユングリング中の魔力が一樣に抑えられた分、変わらず

魔を惹くイヴの存在は、新月の夜は特出して目立つ。カポロは毎年、闇が通る夜には幾重にも結界を張って、彼女を隠してきた」

「……しかし、一年前に婆さんは死んだ」

「そうだ。もう、結界を張ってイヴを隠せるものは、この村にはいない。魔物の私にも、アグネにもオルヴァにも、結界は作れない」

カポロは間違いない人間であつたが、優秀な魔女でもあつた。

彼女が最も得意としたのが、人外との会話の術と、結界を組み上げる術だつたのだ。

それは血によって受継がれる才能であり、薬草のように知識を身につけるだけではどうにもならない魔法であつた。

しかし、男子しか生まなかつたカポロの能力は、残念ながら後世に続くことなく彼女の死と共に途絶えてしまった。

闇の到来が近づくにつれ、結界に頼れないフェンリルは焦つた。

しかし、イヴの側に長く過ごした彼は、あることに気づいていた。イヴが魔物に体液を分け与える時に起こる、ある変化に。

それは毎回唇と唇を合わせることによるのだが、イヴの唾液が魔物に浚われると同時に、少なからず魔物のそれもイヴの中に入る体液の交わりが起こるのだ。

その時、彼女が放つ狂おしいほどの甘い香りが、ふつと緩む。

「イヴの魅了はある意味魔力だ。その彼女の魔力と魔物の魔力が交わる時、それらは互いに中和されて無に近づく」

そして中和の度合いは、魔物の魔力に大きさに比例するのだ。

イヴが、闇に見つかればどうなってしまうのか、実際のところフェンリルにも分からない。ただ、カポロが感じていた危機感は、やがて彼女と共にイヴを守る魔物にもうつつていった。

イヴが、何故あれほどまでに魔物を惹き付けるのか。

彼女の体液が、何故あれほど甘美であるのか。

その理由を、イヴを育てた魔女はもしかしたら知っていたのかも
しれない。

だが、彼女はそれを誰にも イヴ本人にさえ伝えないまま逝つ

た。

「大きい魔力が必要だった。イヴの身に満たされた魅了を全て受け止め凌駕できるような、強さと理性を備えた魔物が必要だった。そういう意味ではシド、お前は私の望んだ通りの存在だ」

「それは、どうも」

イヴを新月の闇に奪われる恐怖を漠然と感じながら、フェンリルは力の強い魔物を探していた。

カポロは存命中、件の新月の夜だけではなく常日頃から、ラムール村に結界を貼っていた。

矮小な魔物なら問題なく通り抜けられるものの、魔力の強いものは弾かれて村には入れない。

高位の魔物であるアグネやオルヴァがイヴの元にやってきたのも、やはりカポロが亡くなって結界が弱まってからだ。

「カポロの結界は魔力に強く作用する。結界の中で過ごすことを許された私は、魔力を抑えられた。その効果は彼女が死んでからもしばらくは残り、一年経った今ようやく私も元の力を取り戻したところだ。……あの森は何度も通ったが、お前の存在に気づいたのもやっと昨夜」

「なるほど。婆さんの結界の作用とやらは、俺から漏れ出す魔力をも抑えていたということか」

十一番目の新月は、もうすぐそこまで迫っていた。

焦りを感じていたフェンリルに、迷っている暇などなかったのだ。昼間は人の姿をとれない彼はイヴにシドを掘らせ、現れた彼を見て確信した。

彼なら、闇の目からイヴを隠すことができるに違いない と。

「それで？ お前は俺に何をさせたい？ その闇とやらが通る新月の夜の間に、イヴの口を吸いまくっていいのかわかるか？」

「それが足りるなら、私がそうする。他の者に任せようなどと思っものか」

魔物らしく獰猛な笑みを浮かべるシドに対し、フェンリルはさも憎々しげに吐き捨てた。

声変わり前の少年のような、高く澄んだ美しい声だが、奏でる言葉は硬く重苦しい。

解放されたフェンリルの魔力は、シドのそれと互角とも言える。

そもそも、自分の手に負えないような存在を、彼が大切な少女の側に置こうとするわけではない。

フェンリルがシドにイヴを託そうとする理由は、魔力の大きさだけではないのだ。

高位の魔物としては他にひけをとらない人魚アグネにも、一角獣オルヴァにも無理なのに、シドには可能なこと。

それは、一体何なのだろうか。

「では、俺は何をすればいい？ これも何かの縁だ、協力は惜しまないぞ」

そう、軽い口調で紡がれたシドの言葉に、フェンリルはますます苦しげに顔を歪め俯いた。

月明かりが照らす中、真っ黒い髪の長身の魔物と、白に近い銀髪の小柄な魔物という、対照的な二つの影が対峙する。

やがて、ようやく決心がついたように、フェンリルは顔を上げた。そして、いっそ殺意を込めたような瞳でシドを見据えて、言った。

「新月の夜の間中　　イヴを、抱け」

銀狼

一年に一度。

十一番目の新月の夜に、強大な闇が頭上を通る。

イヴがそれに見つかれば奪われるとの恐れにとらわれ、フェンリルは力の強い魔物を探していた。

イヴの魔物を魅了する力と同等、あるいはそれを越える強さの魔力でもって、彼女から放たれる甘美な気配を中和し、闇から隠す。

そのためには、イヴと魔物が体液レベルで深く交わる必要があるつまり、身体を交えろと、フェンリルはシドに命じたのだ。

それには、さすがのシドも一瞬ぼかんとした。

そして彼には珍しく口籠り、戸惑ったように黒髪をかき上げると、真面目な顔で苦々しい様子の銀狼に向かい合った。

「……なるほど、それは大役だな。役得と言うべきか」

「不本意だ。イヴの身体を貴様に許すなど　気が狂いそうなほど悔しい」

それはフェンリルが相当の葛藤を経た上で、他に方法が見つからず不承の内に出さざるを得なかった答えなのだろう。

彼は言葉通り悔しげに、その美しい銀髪をがしがしと掻き乱した。「……そんなに悔しいなら、自分でイヴを抱いたらどうだ？　その子供の身体でも何とか……」

見兼ねたシドが軽い気持ちで口にした言葉に、弾かれたように顔を上げたフェンリルは叫んだ。

「何ともならないからっ……！！　私ではどうしようもないから、お前に託しているんだっ　……！！」

少年の姿をした銀狼の瞳は深く傷つき、叫びは悲鳴のように聞こえた。

それにはシドもいささか驚き、困ったように自分の黒髪を掻いた。フェンリルも、感情を剥き出しにしてしまった自分を恥じるように俯き、ひとつふうっと重くため息を吐くと、何かを抑え込むようにひどく冷めた声で続けた。

「私には、イヴを抱くことはできない。私は、無性なんだ」

フェンリルは、銀狼一族の長の嫡子として生を受けた。

高位の魔物である一族の中でも、稀にみる魔力を備えて生まれてきた次代に、しかし周囲の視線は冷たかった。

「銀狼一族の長は世襲制で、男女を問わず第一子に継がせるのが掟。しかし、継承権第一位として生まれた私は無性。子を成す機能がなかった。子を生むことも生ませることもできない私を、誰も長とは認めたくなかった」

それでも、フェンリルの特出した魔力は大人達にとって脅威だった。

祖父である一族の長老の手で、生まれてすぐ魂に楔を打たれて力を抑えることで、彼はかろうじて生かされた。

楔のせいで狼の姿の時は人語を操れず、人型をとっても今夜のように幼い子供の姿にしかねないが、それがフェンリルが肉親から与えられた唯一の愛情だったのかもしれない。

やがて、父の妾が男子を生んだ。

その腹違いの弟に長を継がせるには、長子相続との掟の都合上、フェンリルの存在が邪魔になった。

「それで、お前は一族を追い出されたと？」

「一族の繁栄のために、死ぬと言われた。父に、そして母に」

「……」
「私は、別に構いはしなかった。生きていても誰にも必要とされな
い、生まれて楽しいと思っただけなど、何にもなかったから。だから
谷へ身を投げた」

しかし、フェンリルの身体の強靭さは、彼を死なせなかった。

傷だらけの状態で気を失った彼を、川が下流へと運び、やがて岩場へと打ち上げた。

いつしか意識は戻ったが、痛みも悲しみも、もう何も感じなかった。

このまま静かに眠りたい、静かに無に還りたいと、黄泉へと歩を進めたフェンリルを、その時何かが引き止めた。

「甘い香りがして、目を開けたんだ。そうしたら、傍らに彼女が小さな小さな、イヴがいた」

狼の姿のフェンリルが倒れていたのは、イヴとカポロ婆さんの家の近くにある河原だったのだ。

瀕死の重傷を負って魔力が極端に弱っていたからこそ、カポロの結界に弾かれずに村に入れたのだろう。

当時、イヴはまだ七歳の子供だったが、すでに自分の身体を満たすものが魔物に好まれることを理解していた。

おおかみさん、しなないで。イヴをたべて、げんきになって

「自分の腕を傷付けて、イヴは私に血を差し出した。小さな娘が痛みを耐えて糧を与え、私に生きよと言ってくれたんだ」

イヴの血を舐めると、美味かった。

今まで食べてきたものは、何の味も温度も感じなかったというのに、彼女の血は甘く温かく　そう思ったとたん、フェンリルは泣いた。

悲しいのか嬉しいのか分からない。けれど、銀狼の赤い目から溢れる涙は止まらなかった。

なかないで、おおかみさん

恐れを知らない幼いイヴはそう言って、獣の姿をした魔物を抱きしめてくれた。

「私はその時、生きたいと思った。どうせ行くあてもない、ならばイヴを側で守りたいと思った」

「それからずっと、イヴの側に？」

「そうだ。カポロとは話が通じたので、包み隠さず身の上を話せば、イヴの側においてもらせることになった。おそらく、この身を哀れんだのだろうが、そんなことはもうどうでもよかった。イヴの傍らで、私は生まれて初めて生きる喜びを知った」

権力とは残酷なものだ。

ときには親子の縁も愛情もねじ曲げてしまう。

それは、魔物であろうと人間であろうと、大きな違いはないだろう。

銀狼という高貴な一族の中で傷ついたフェンリルは、人間の小さな村でそれを癒され幸せを手に入れた。

その幸せの象徴たるイヴを、正体の分からぬ闇などに奪われてなるものか。

そのためには イヴを失わないためには、フェンリルには手段を選べるほどの余裕がもうなかった。

「私とて、こんなことをしたくない。自分で命じておきながら、本当は腸が煮えくりかえりそうなくらい、お前が憎らしい」

「そりゃ、どうも」

「だが……私はどれほど望んでも、イヴを抱くことはできない」

「それで、俺に？」

「口惜しいが、他に方法が思いつかない」

苦々しく呟くフェンリルに、しかしシドはふっとため息のような笑いを漏らし、くるりと背を向けて言った。

「悪いが お前の言いなりになるつもりはない」

とたん、彼の背後で凄まじい殺気が膨れ上がった。

並の魔物ならば腰を抜かし動けなくなるほどの魔力の迸りが、シドの背中に突き刺さる。

少年のような声が、激しい怒気を含んで地を這った。

「貴様……イヴを好いているのではないのか。彼女を抱きたくはないのか」

けれど、シドは涼しい顔をして、むしろ笑みさえ浮かべて顔だけ後ろを振り返った。

「そうだな。あれは、面白くて可愛いから好きだ。色気は皆無だが抱きたいとも思う」

「それならば」

「では聞くが、この件に関して、イヴ本人はどこまで知ってどこまで納得している？」

「……」

シドの言葉に、フェンリルはぐっと口を噤んだ。

イヴは、何も聞かされてはいない。魔物達が怯える十一番目の新月の闇の存在さえ、彼女は知らないのだ。

「何も知らさず守るなどと、さすがに過保護が過ぎるんじゃないか？ お前も、婆さんもな。自分のことは自分で知っておくべきだろうし、自分に降り掛かるかもしれない火種の存在を把握することもまた、イヴを守ることに繋がると思うぞ」

「得体の知れないものがお前を浚うかもしれないから、魔物相手に股ぐらを開いて匿われると？ そんなこと、言えるものか」

「おい、表現が生々しいぞ」

「言葉で納得させられる自信がないから、こうやってこそこそ手を回しているんじゃないか」

それでなくても、思春期を年寄りばかりの中で過ごしたイヴは、性愛に関する話題には極端に疎い。

魔物に褒美を与えるために、キスの技術だけは無駄に向上しているが、それ以上のことを彼女に教える人間も手本も今までなかったのだ。

「まあ……お前がひどく切羽詰まった心境であるのは、よく分かった。先ほど言った通り、協力を惜しむつもりもない」

「では」

少年の姿をした銀狼は、迫る期限への焦りにいささか冷静さを失っているように見えた。

シドは片手を上げて「まあ待て」という仕草をすると、もう一度彼に向かい合ってから口を開いた。

「ただ、保護者の銀狼様にお膳立てされて、本人の同意を得ぬまま事に及ぶなどというのは、俺の主義に反する」

「……」

「だが、安心しな。次の新月まで、必ずあいつを口説き落としてみせる。そして、合意の上でイヴを抱こう」

シドの言葉を聞いたとたん、フェンリルはその中性的な美しい顔を嘲笑に歪め、ふんと鼻で笑って吐き捨てた。

「思い上がるな。イヴが、そう簡単に思い通りに動くものか。あと、十日余りだぞ。そんな悠長なことを言っていられるか」

しかし、シドはそれに堪えた様子も気を悪くした様子もなく、自信に満ちた笑みを浮かべて両腕を組み、力強い視線を真っ直ぐに相手に返した。

「ではこうしよう。明日より七日の内にイヴを落とせなかったら、お前のいうとおりにしよう。その代わり、期日までは口出しせず黙って見守れ」

「……大した自信だ」

フェンリルは憎々しげにシドを睨んだが、結局は彼の出した条件を飲むしかなかった。

実際のところ、彼に協力をあおぐしか今は方法はないのだ。

夜空に輝く月は、まだ丸い。

それが欠けていく先に、一体何が待っているのか　今はまだ誰にも分からなかった。

出掛けよう

「シドー、おはよ。お弁当作って」

「お前……そういうことは、昨日の夜のうちに言っておけ」

むにやむにやと眠い目を擦りながら起きてきたイヴは、すでにキッチンに立っていたシドを見つけるなりそう言った。

肩を少し越えるほどの長さの、甘い色の混ざった真っ直ぐなブロンド。

踝まで覆い隠すすとしたクリーム色の寝間着は、所々にリボンが散りばめられていて、意外に可愛らしいデザインだ。

イヴの片手は不格好な黒猫のぬいぐるみのしっぽを引っ掴んでいて、彼女をあどけない子供のように見せる。

朝食を作るシドの側までやってきて、手元を覗き込んで「おいしそう」と微笑む彼女に、それを見下ろす魔物の視線も柔らかく緩んだ。

「それで、弁当を作ってどうする？ 出掛けるのか？」

「うん、そう。一日逃避行する」

「逃避行？」

不思議そうに言葉を繰り返したシドに、イヴはようやくしつかり目が覚めてきたのか、茶色い目をぱっちり開いて視線を返した。

「だって、今日も来るって言ってたでしょ、ハグバルド。あんなの相手毎日してたら、胃に穴が開く」

「だからといって、留守にしたらしたで、今度は約束を破ったとうるさいのではないか？」

昨日半日この家に居座った領主の末息子は、シドの目から見ても大変面倒な種類の人間だった。

無駄に自尊心が高く、他人を見下す事でしか自分を保てない、愚かで哀れな男。

相手にするに値しないとの評価を下したハグバルドに、シドは何を言われようと腹は立たない。

それは、銀狼フェンリルも同じだろう。

ただ、その過ぎた悪意がイヴに向けられると思うと、いささか胸がざわついた。

しかし、そんな魔物の気も知らない娘は、どこまでもものん気な様子。

「明日になったらアグ姐さんを説得して、一回だけ顔見せてもらうから。そうやって、誤摩化し誤摩化していくよ」

「それは、そう得策でもないと思うが……」

「いいの、いいの。とにかくお弁当。三分、よろしくね」

「三分分？」

「そう。アグ姐さんは今日も引きこもるだろうし、ウォルスは食費がかからなくて大変よろしい。オルヴァさんはにんじん与えとけばご機嫌だから、お弁当は私とフェンリルと、せっかくだからシドも一緒においで」

「……ふむ」

昨日仲間入りしたばかりの新人りに対しても、化け物屋の主人は大らかだ。

シドとしてはへたに警戒されるよりは都合がいいが、そんな無防備で本当に大丈夫なのかと心配にもなる。

そもそも、イヴが彼を受け入れたきつかけというのが、昨日家に来てすぐ作ってやった即席の朝食なのだ。

年頃の娘がそんなに簡単に男に餌付けされていいのか。

魔物のくせに真つ当な疑問にため息をついたシドは、ふと彼女を見下ろした。

自然とかち合った上目遣いの茶色い瞳は、色合いこそ地味だが柔らかくて、愛嬌がある。

「……イヴ」

「うん？」

「お前……可愛いな」

「……」

イヴの少しだけ跳ねた寝癖を手櫛で整えてやりながら、それは自然とほとんど無意識にシドの唇から零れ落ちた言葉だった。

しかし、彼女は一瞬きよんとしたかと思うと、乙女らしく頬を染めて照れるどころか「はあ〜」と盛大なため息を返してきた。

そして、仕方がないなあとでも言いたげにシドに顔を近づけると、緩くほどけていた彼の唇に自分のそれをちゃんと押し当てたのだ。

そのまま、柔らかい舌が隙間に差し入れられ、とたん甘く芳しい蜜のような味がシドの口内に広がった。

もちろん、おはようのキスではない。

あまりに躊躇なく与えられたイヴの蜜に酔って、シドは思わず両腕を広げて彼女をかき抱こうとした。

しかしそれが身体を包み込む前に、イヴは蝶のようにふわりと彼の袂から飛び立ってしまった。

「お世辞言わなくなったって、ほしいならそう言えばいいじゃない」

「……世辞のつもりは」

「はいはい。とにかく、お弁当よろしくねっ」

イヴはそう言うのと、「オルヴァさんにも、挨拶がてら声掛けとこう」と呟き、無言になったシドを残して何ごともなかったかのようキツチンを後にした。

シドとしては素直な賛美を口にしたただけだというのに、イヴはそれが魔物が唾液という嗜好品が欲しくて言った、媚とでも取ったのだろう。

心外なこと、この上ない。

しかも年頃の娘が、キスに対する抵抗感も恥じらいも薄過ぎるのは、やはり由々しき事態である。

「……なるほど、たしかにこれは手強いかもな」

そう呟いたシドの腿を、足元にいたフェンリルが「そらみたことか」というように、硬い尻尾でべしりと叩いた。

「お前と婆さんが、育て方を間違えたんじゃないか？」

負け惜しみにも聞こえる情けない魔物の声を背に、すっかり狼の姿に戻ったフェンリルは、愛しい少女の後を追ってキッチンを出て行った。

残されたシドは、やれやれと言うように大きくため息を吐く。

そして、ふと視線を巡らせると、ダイニングテーブルの上に置き去られたビロードの塊を発見した。

ごろごろと机に突っ伏して微睡むのは、イヴ手作りのぬいぐるみに憑依したままの、幽体ウォルスだ。

「おい、お寝坊のコブタちゃん」

「子猫ちゃん、だ！ 間違えるな、化け物！」

シドが呆れた様子で声をかけると、彼はくわりとフェルトで縫われた口の中を見せて吠えた。

イヴは黒猫だと言い張るのだが、どうにもポテっとした体型のそれは、子豚にしか見えない。

まあ、それなりに可愛らしくはあるが。

「何でもいいが、寝るなら他所にしる。皿がおけん」

「うるさい。私は今幸せを噛み締めているんだ。そっとしておいてくれ」

「その割には、ひどく眠そうだが？」

ウォルスは昨夜、愛しのイヴとの添い寝を許可され、薔薇色の夜を過ごしたはずだ。

幽体の時は、彼に寝ている間に悪戯をされないようにと、イヴは寝室にありがたい護符を貼付けてその侵入を許さなかった。

しかし、育ての親であるカポ口婆さんとの思い出の品だからか、ぬいぐるみになったとたんウォルスの扱いは目に見えて良くなった。

小さなぬいぐるみの身体では、そう悪さはできないだろうと判断したのであるが、イヴのそういう無防備な行動は、時に危なげでな

らない。

「眠れなかったんだ、ドキドキして……！ イチゴちゃんの寝顔、ちよおカワイくって……っ！」

「……そうかい」

現に、可愛らしいはずの自称子猫のぬいぐるみは、夜の間ずっとイヴに不純な眼差しを注いでいたらしい。

それを知って何となく胸の辺りがもやっとしたシドは、イヴの寝顔を思い出して身悶えるぬいぐるみをわし掴むと、リビングの方へぽいっと放り投げた。

裏口から出ると、すぐ正面に厩舎が建っている。

厩舎と言ってもそう大きいものではないが、オルヴァ一人だけの根城としては充分だ。

ラメのようにキラキラしたものが混ざった彼の白い体毛と、同じく輝く琥珀色のたてがみが、朝日を反射して実に眩しい。

ルビーのような赤い瞳は白く長い睫毛にびっしりと覆われ、一見すると美少女的な風貌にも思える。

だが??

「こらあつ、イヴっ！ 夜着で外を出歩くとは、なんとはしたないっ！」

オルヴァは声はダンディ、中身は少々頑固オヤジ。性別的には立派な雄の魔物である。

ユニコーンの通説に違わず、純潔の乙女をこよなく愛する彼は、普段からイヴの貞操についていろいろと口やかましい。

ナイトドレスから着替えないままやってきたイヴに、足元の飼葉をドストス踏みしだいて説教をした。

「はいはい、すぐ着替えてくるよ。それで、もう少ししたら出掛けようと思うから、オルヴァさんも一緒に来て？」

「うむ、よかるう。そなたは私の背に跨がるといい」

「大丈夫だよ、歩いてのんびり行こう?? 日が落ちるまで、今日は

家に帰らないつもりだから」

「??? なっ……! 年頃の娘がそんな時間までどこをほっつき歩く気だっ! 門限は五時だといつもっ……」

「はいはいはい。オルヴァさんが一緒なんだから、いいじゃない。困った客が来る予定だから、彼が諦めて去るまで帰れないんだよ」

「まあ……私がいれば、心配はないがな」

「でしょ? オルヴァさんが一緒だと、イヴ安心だなー」

「うむ」

イヴのよいしょに、オルヴァはまんざらでもなさそうに鼻を鳴らして頷いた。

ユングリングには、国主である国王が住まい政治を行う王城と並び、聖廟と呼ばれる尊い場所が存在する。

聖廟の本来の意味は聖人を祀る墓所であるが、この場合それを含めた神殿や寺院のような施設を指す。

崇拜の象徴として奉られるのは、聖女と呼ばれる選ばれた乙女である。

それを補佐するために多くの司祭が仕え、実際に聖廟を牛耳るのは聖女ではなく、司祭のリーダーである司祭長である。

政教分離の原則を掲げながらも、歴代の司祭長の多くは王族が担い、実質は聖廟もまた国王の支配下にあると言える。

当代の司祭長には現国王の末弟が就いているが、数ヶ月前から体調を崩して臥せっているらしく、その後釜を狙う権力争いで聖廟内は静かな混乱を見せているとの噂だ。

また、それを助長させているのが、肝心の聖女の不在である。

一角獣オルヴァは、元々は先代の聖女の馬だったそうだ。

彼は清らかで美しい乙女にとらわれ、聖廟の中で彼女の愛玩物として暮らしていたが、十数年前のある時、突如聖女が失踪をした。

その原因は誰にも分からず、司祭達も手を尽くして彼女を探したが、ユングリング中どこにも見つけられなかった。

聖女は純潔であるとともに、国を出ないことが最低条件である。

もしも彼女が出国していた場合、その時点で聖女の称号を失うので、捜索の手は国外にまでは伸ばされなかった。

本来なら、次の聖女が確定してからその交代が行われるので、突然の現役聖女の失踪は異例の事態であった。

思えば、イヴを連れ去るのではないかと銀狼が恐れている、十一番目の新月の闇が現れ始めたのも、その頃であった。

崇拜の象徴である聖女の不在を埋めるためにも、神聖なイメージが強く角から万能薬を作り出せる貴重なユニコーンを、聖廟は手放したがらなかった。

しかし、オルヴァとしては愛しき人のいないその場に未練などなく、司祭達の懇願も蹴散らし聖女を探して放浪の旅に出た。

そうして一年ほど前、カポロが亡くなり弱くなった結界を通り抜けてイヴの元に辿り着き、彼女に一目惚れしてそのままこの村に居着いたのだった。

初めてイヴと出会った時、オルヴァは一瞬彼女を、愛しき女？？失踪した聖女と見間違えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4172x/>

化け物屋開店

2011年10月29日03時09分発行